2019（令和元）年度

千葉県NIE実践報告書

（*Newspaper in Education*＝教育に新聞を）

睦沢町立睦沢小学校
市原市立清水谷小学校
習志野市立東習志野小学校
いすみ市立浪花小学校
市川市立新井小学校
千葉市立検見川小学校
館山市立館野小学校
船橋市立前原小学校
鎌ヶ谷市立鎌ケ谷中学校
香取市立小見川中学校
柏市立手賀中学校
千葉県立成田国際高等学校
昭和学院秀英中学校高等学校
松戸市立松戸高等学校
千葉県立君津青葉高等学校
千葉県立小見川高等学校
千葉県立大網高等学校
千葉県立仁戸名特別支援学校
千葉県立四街道特別支援学校

千葉県 NIE 推進協議会

ご　挨　拶

千葉県ＮＩＥ推進協議会会長
藤　川　大　祐
（千葉大学教育学部教授）

平素より、千葉県 NIE 推進協議会の活動に対して多くの方々にご協力いただき、ありがとうございます。2019年度の NIE 実践報告書をこうしてお届けできることとなり、関係の皆様のご尽力に感謝申し上げます。

2019年度、千葉県を台風や大雨が襲い、多くの被害が生じました。そして、新型コロナウイルスの感染が広がる中で、千葉県でも少しずつ感染者が広がり、学校が臨時休校となるなど、影響が広がっています。千葉県内も競技会場となっている東京オリンピック・パラリンピックは延期が決まり、感染の拡大が止まらない中、新型コロナウイルスの影響は今後も世界中に長期にわたって続くことが考えられます。

感染拡大の真っ只中にある現在、何かを言うことは非常に困難なのですが、このように前代未聞と言える事態が進行している中にあってこそ、多様な情報にアクセスし、冷静に情報を読み取って対応することが重要であることは間違いありません。

たとえば、2020年3月初旬、学校の臨時休校が始まった際、各地でさまざまなことが起きました。突然の休校要請に対する対応は、各地で少しずつ異なり、すぐに休校に入った地域・学校もあれば、1日から数日の猶予をおいてから休校に入った学校もあります。突然の休校で子どもの居場所が問題になる中、学校での子どもの預かりへの対応も、地域によって異なりました。他方で街に子どもたちが出かけている様子が報じられたり、インターネットを活用した遠隔教育の取り組みが各地で行われたりもしました。

世界規模で見れば、当初は武漢を中心とした中国での急激な感染拡大の様子が伝えられたり、クルーズ船での感染が話題になったりする中、日本でも感染者が多い状況がありましたが、イタリア、イラン、スペイン等での感染が広がり、アメリカ等も含めた欧米諸国での急速な感染拡大が深刻な問題となり、イタリア等では医療崩壊とも呼べる状況に至りました。多くの国が市民の行動を制限し、外国との移動を抑制する動きをとっています。

私たちは新聞等のメディアを通してこうした各地の様子を知り、そして自分たちはどうするかを考えなければなりません。世界の状況を俯瞰的に見ながら、自分たちはどうするかを決めていかなければならないわけです。

2020年度がどのような年になるのか不透明な状況ですが、社会が大変な状況だからこそ、子どもたちが切実な思いをもって情報の読み書きを学ぶ学習が重要です。NIE の推進が、子どもたちが困難な社会を生き抜き、問題を解決できる力を育てることにつながることを、願っています。

目　次

小学校

睦沢町立睦沢小学校 …… 1
市原市立清水谷小学校 …… 3
習志野市立東習志野小学校 …… 5
いすみ市立浪花小学校 …… 7
市川市立新井小学校 …… 9
千葉市立検見川小学校 …… 12
館山市立館野小学校 …… 16
船橋市立前原小学校 …… 19

中学校

鎌ヶ谷市立鎌ケ谷中学校 …… 22
香取市立小見川中学校 …… 25
柏市立手賀中学校 …… 28

高等学校

千葉県立成田国際高等学校 …… 31
昭和学院秀英中学校高等学校 …… 33
松戸市立松戸高等学校 …… 36
千葉県立君津青葉高等学校 …… 40
千葉県立小見川高等学校 …… 43
千葉県立大網高等学校 …… 45

特別支援学校

千葉県立仁戸名特別支援学校 …… 47
千葉県立四街道特別支援学校 …… 50

生きる力を備える防災教育　～新聞から学ぶ防災教育～

睦沢町立睦沢小学校　　大塚　久美子

１　はじめに

本校は、ＮＩＥ教育推進の指定を受け、２年目の取り組みとなる。本校の学校教育目標は、「きらきらと輝きいっぱい睦沢の子」である。それをもとに、目指す児童像として,「好奇心を持って進んで学ぶ子」「やさしく思いやりのある子」「元気でたくましく健康な子」の３点を掲げている。これらを育成するために、今年度は全校共通の「生きる力を備える防災教育～新聞から学ぶ防災教育」をテーマに実践を行った。

２　実践内容

（１）低学年の取り組み

＜写真が伝えたいことは何だろう＞

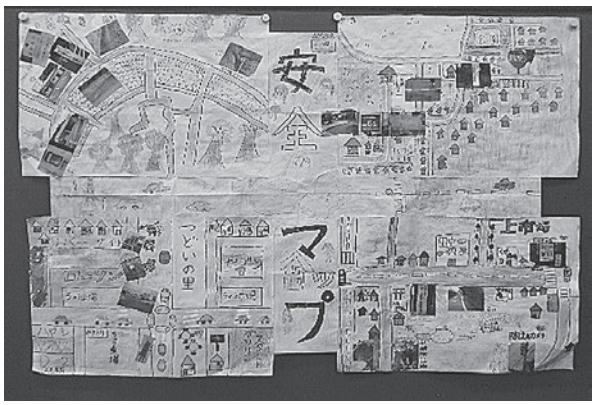
新聞を手に取り、個々で気になった写真を１つ取り上げる。そして、ペアになり友達に「どんなところが気になったのか。手にしたわけを伝えよう。」とルールを決めて、ミニ新聞作りを行った。自分たちの選んだ写真が伝えたかったことを考えて、文にする。どう思ったかを伝え合い、さらに交流を深めていった。同じ写真でも伝えたいことが違うことに気づいている児童もいて比べる良さを感じた。

（２）中学年の取り組み

＜災害から学ぶ＞＜新聞から学ぶ＞

３年生では、社会科の「災害から学ぶ」の学習では、消防署や警察署の見学に行く前に、学習新聞に自分の書きたいことは何か、どんな取材をしたら必要な情報が手に入るのか、そのために必要な写真は何か、紙面構成をどうするかを考えさせた。そうすることで、見学の資料にあるもので作成していた新聞よりもより伝えたいことがはっきりわかる新聞となった。様々な新聞があることを知ったことが大切な学びとなり大きな成果となった。

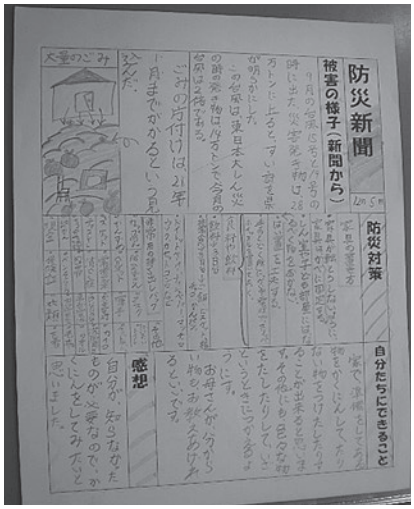
また、４年生では総合的な学習の時間の「安全マップ」を作成する際に同じように情報集めの仕方を新聞から学んだ。何を伝えるか、どんな時に活用するかなど、ゴールがあることで、作成の仕方が変わってきたように思われる。



（3）高学年の取り組み

＜天気と地震に目を向けて＞

理科の学習を通して、新聞やインターネットの情報を自分の知識と結び付けて、調べたことをミニ新聞にまとめた。



その際に、すぐ手に取れて情報を得ることができる新聞は、子どもの主体的な学びを実現できる手助けとなる、素晴らしい資料であり、身近な存在になったとも言える。関心を持って調べ、自分の言葉でわかりやすく人に伝えるという活動は、新学習指導要領の「何を学ぶのか」「どのように学ぶか」「何を学んだのか」を具現化する上で重要である。そして、新聞記事の内容や新聞自体を教材とし、課題解決のために、情報の選択や話し合いを通して、自分の考えを深めることができた。

３　まとめ

・各学年の発達段階に応じたねらいを持って活動に取り組ませたことにより、新聞の持つ教育的な価値を引き出し、意欲的な学習につながった。

・低学年から高学年まで全校で新聞を学習に取り入れたことにより、新聞を身近に感じ自分たちの生活と密接につながっていることに気付くことができた。

・本年度は、防災という共通のテーマをもとに実践したことにより、新聞を活用するうえで焦点化を図ることができた。

・今後も新聞を有効活用できるような環境作りや学習の場を設定し、さらに新聞を通して知識を広げていきたい。

「新聞を手軽に活用しよう」

市原市立清水谷小学校　　阿部　広樹

１　はじめに

本校は平成30年度よりＮＩＥ実践校の指定を受けた。１年目となる昨年度はまず、「新聞に親しむ」ということをテーマとして、環境作りを中心に、児童へのはたらきかけを行った。

２年目となった令和元年度は「親しむ」から「活用する」をテーマに活動を進めた。

２　実践の内容

（１）スクラップ活動

①記事を切り抜く。

子どもたちに新聞を配付し、興味をもった記事を見付け、切り抜く作業を行った。自分の興味のある記事を探し出すことを通して、改めて社会の出来事に触れ、友だち同士で話し合う姿が見られた。この学習では、教師が必要以上に指導せず、子どもたちの興味関心に任せることで、ハードルを低くし、あれこれと難しいことを考えずに楽しく取り組むことを意識した。

②切り抜いた記事を台紙に貼る。

記事を台紙に貼り、自分なりに考えタイトルを入れたり、感想を書いたりして掲示した。作業的な活動を通して、楽しみながら活動することができるように意識した。

③グループで発表する。

台紙に貼った記事をグループのメンバーに紹介する活動を行った。ここでは、「だれが、どうした。」等、簡単な紹介パターンを初めに示し、話すことが苦手な児童にとっても負担なくできるように指導した。

（２）担任による新聞記事の紹介

学級担任の教師が朝の会の時間等を使って、新聞記事について紹介する機会を意図的に設けた。教師が時事的な話題を語るときのきっかけとして活用した。

３　実践の結果

（１）記事を切り抜いて台紙に貼り、グループで発表する活動では、様々な成果が得られた。

まず、自由に記事を選択し切り抜くという作業そのものに楽しさを感じていた点である。新聞を広げると、ジャンルを問わず、様々な写真や記事が掲載されている。「この前習ったことが載っているよ」「昨日のニュースで見た」等と、時間を忘れて夢中になって取り組むことができた。

次に、掲示することで記事の内容が友達と共有され、互いに関心のある事柄について理解を深められたという点である。新聞はコミュニケーションツールとして小学生の子どもたちの間においてもしっかりと成立するということもわかった。最後に、発表の場面で得られた成果として、子どもたちなりに記事の内容を正確に理解した上で、わかりやすく説明しようとする姿勢が見られたことである。具体的には、難しい語句や用語を自分で調べたり、友達と確認し合ったりするといったことである。

（２）担任による新聞記事の紹介では、子どもた

ちが新聞を身近に感じることができるように意識して取り組んだ。特に低・中学年の児童を対象とした場合については、記事の選択に留意するように心掛けた。スポーツ記事の他、社会的に大きな話題となっている記事を選ぶことで、子どもたちが新聞に対して興味をもつことができた。

４　まとめ

それぞれの活動を通して、新聞を身近に感じることのできる児童が増えていることについては大きな成果である。新聞のもつ教育的な価値をさらに引き出し、活用できるように実践を重ねていきたい。

「新聞に親しむ心を育てる」

習志野市立東習志野小学校　　牧野　翔太

１　はじめに

若者の新聞離れが叫ばれている昨今、小学校の学校現場で新聞を教育活動に活用することはとても有意義に感じた。様々な教科で新聞を活用し、たくさんの成果が得られた。特に今年度は「新聞に親しむこと」をテーマに設定した。

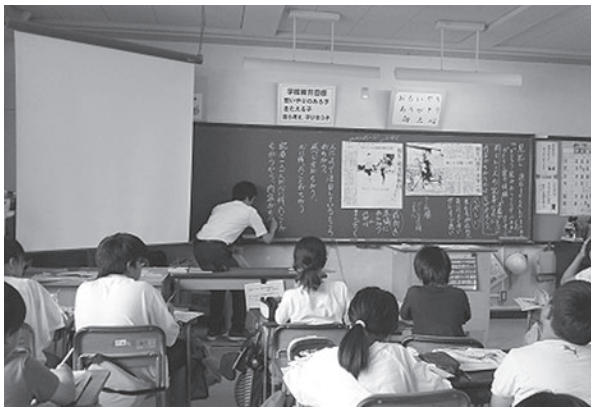
２　実践状況

・理科　「台風と天気の変化」

「台風は私たちにどのような影響を与えるのだろう」という学習問題を解決するために、台風19号の被害の状況が分かる記事を読ませた。同じ日付の新聞を８社分用意して、同時に比べ読みができるように、移動式のホワイトボードに貼り出した。

・国語　「言葉と事実」

単元の導入で、見出しを隠した同じ日付のスポーツ記事を２社分見せて、見出しを想像したり、実際の見出しを見て気付いたことを発表したりした。



・社会科　「情報産業とわたしたちのくらし」

情報メディアとしての新聞の長所や短所を実際の新聞を見ながら考えた。また、テレビ番組の配置のしかたにどのような工夫があるのか、新聞のテレビ欄を使って調べた。「知る番組」と「楽しむ番組」の２種類に分類させて、気付いたことを発表させた。

・国語科　「意見文を書こう」

新聞の社説欄に投稿された文を読み、それに対して自分はどのように考えたか、意見文を書いた。筆者の考えに賛成する場合は青い紙、反対する場合は赤い紙に書いた。書いた紙は教室掲示として貼りだし、友達がどのような意見をもったのか見ることができるようにした。

３　結果

実際の新聞を見ることで、見出しには読者の興味を惹きつけるような言葉が短く端的に使われていることを学ぶことができた。また、大見出しや小見出しやリード文があることも知ることができた。リード文には記事の内容が分かりやすく要約されていることを知った。

台風被害についての記事を８社分比べ読みをしたことで、同じ内容を取り扱った記事でも、新聞記者によって、焦点をあてるポイントが異なることを学んだ。被害件数を大きく取り上げるところもあれば、被害を受けた人の心情に迫る記事もあった。その比べ読みをする中で、共通して書かれていることにも気付いた。共通して書かれていることは大事な情報だから、どの新聞社も欠かさず書いているのだろうと考えることができた。台風によって甚大な被害を受けたことを記事の文章や写真から深く知ることができた。

スポーツ記事の比べ読みをした時は、記者の受け取り方や伝えたいことによって記事や見出しが変わることを学んだ。また、写真も注目させたいことがよく表れている写真が使われていることにも気付くことができた。

社会科の情報産業の学習では、新聞には前の日に起きたニュースがすぐ分かることや何度も読み返したり、切り取って保存したりすることができる良さがあることに気付いた。テレビやラジオと比べると情報が１日遅くなるという短所にも気付いた。それぞれのメディアの長所と短所をよく理解して、用途に応じて使い分けることが大切だということを学ぶことができた。

また、テレビ欄を「知る番組」と「楽しむ番組」に分類したことで、朝の時間帯にはニュース番組が多く、昼はドラマが多く、夜はバラエティ番組やドラマが多いことに気付いた。視聴者のニーズに合わせて番組構成を工夫しているということを学んだ。

意見文を書く前に新聞の社説欄を全員で読み、表現の工夫を見つけていった。自分の立場を始めに書くことで、自分の主張が相手に伝わりやすくなることに気付いた。また、意見文を書くときは、身近にあった出来事等、具体例を示すと説得力が増すことにも気付くことができた。書いた意見文は友達同士で読みあった。友達の意見文を読み、同じ題材でも読者によって受け止め方が違うことに気付くことができた。

４　考察

今年度の成果として、テーマであった新聞に親しむ態度を育てることができた。児童が朝読書の時間に自分から新聞を読んでいる姿をたくさん見かけるようになった。自主学習でも新聞記事を切り抜き、自主学習ノートに貼り、その記事についての意見を書く児童も出てきた。そのように進んで新聞を自分の学習に生かすことができている児童を褒めて、クラス全体に紹介することで、どんどんと広がっていくのを感じた。

次年度への課題として、児童のリテラシー能力が向上したと判断するにはどのようにしたらよいか考え、指導と評価が一体となった授業展開を進めていきたい。

５　まとめ

今年度、ＮＩＥ実践校として国語科や社会科を中心に様々な場面で新聞を活用することができた。新聞を活用することで、時事への関心が高まったり、優れた表現方法を学んだりすることができ、とても有意義な実践ができた。次年度も引き続き教育の中で積極的に活用して、新聞に親しむ態度を育てていきたい。また、いくつかの新聞を比べ読みすることで、リテラシー能力も向上させていきたい。

新聞に親しみ、関わりを深める

いすみ市立浪花小学校　　市川　幸嗣

1　はじめに

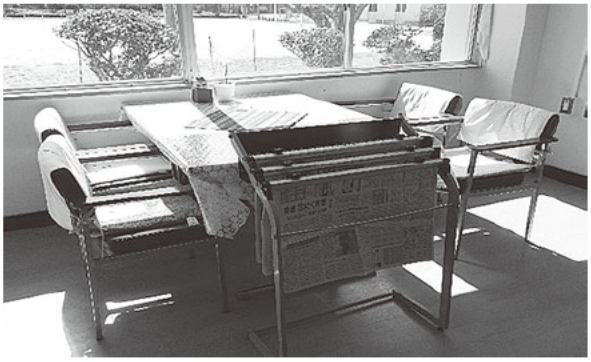
来年度から全面実施となる学習指導要領に「主体的、対話的な深い学び」に関わる指導スキルが明示されているが、学校が子供たちの学力、とりわけ思考力や判断力、表現力を育むためには、さまざまな機会、指導スキルを総動員する必要がある。そのような中、本校は県ＮＩＥ実践校の指定をいただき、改めて新聞の良さに気づかせながら思考力･表現力等の育成に取り組むこととなった。

2　実践状況

（1）新聞に親しむ環境づくり

新聞をいつでも閲覧できるコーナーを図書室に設置し、毎朝送られてくる３社の新聞を図書委員が閲覧コーナーに置いている。それにより図書室を使う児童の誰もが気軽に新聞を手にとり、それを見ることができるようにしている。

そして、図書室に１日置かれた新聞は、翌日には、図書委員によってＮＩＥに積極的に取り組む学年と位置づけた４年生から６年生の教室に配達されている。



（2）新聞を活用した学習

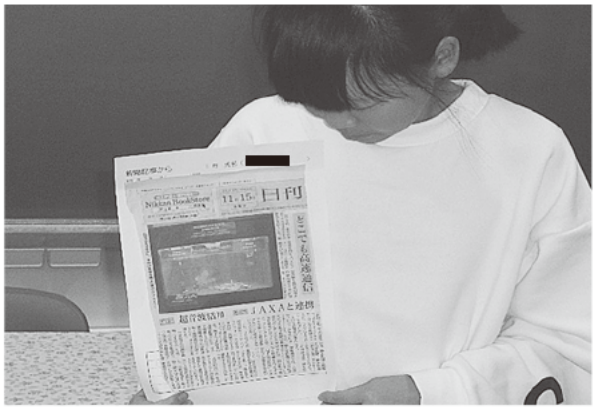
６年生は朝の会で、新聞記事をもとにしたスピーチを行っている。児童個々が興味をもった記事を新聞カード（記事の概要･感想や考えを記入）にまとめ、発表している。

＜新聞カード作成の手順＞

①新聞記事を選ぶ。

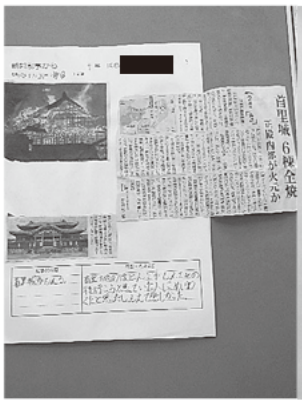
②記事を切り抜き、新聞カードに貼る。

③記事に関する考えや感想を記入する。

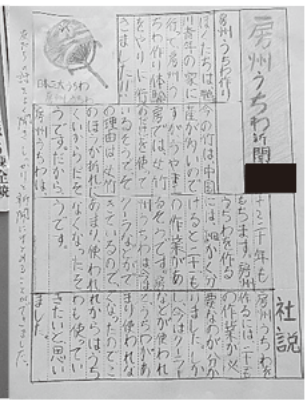


５年生は、気になる記事をグループで選び、感想や意見を出し合った後に、学級全体に発表する活動をしている。発表の場面では、発表を聞いた児童との質疑も取り入れ、発表する児童は自主的にどのような質問をされるかを想定して、インターネットで新聞記事の内容を更に詳しく調べるようになった。

４年生は、６年生が作成した新聞カードを手本に新聞カードづくりに取り組んでいる。さらに、教科学習との連携を図る中で新聞記事のレイアウト等を参考に社会科新聞づくりを行った。



＜新聞カード＞



＜社会科新聞＞

３　結果

（１）新聞に親しむ環境づくり

・図書委員による新聞の設置や教室への配達という活動により、児童が新聞を身近に感じながら活用する意識が高まってきた。

・朝、教室に届く新聞を楽しみにする児童が多くなり、新聞に見入る姿がよく見られるようになった。

・学級担任が気になる記事のことを話題にすると、休み時間に新聞で記事の内容を確認する児童がでてきた。

・図書委員会の活動が活性化されてきた。

（２）新聞を活用した学習

＜６年生の実践より＞

・日本や世界のさまざまな出来事に目を向ける児童がでてきた。

・興味をもった新聞記事をテレビニュースでも見る児童がでてきた。

・新聞記事を読み比べ、新聞社ごとに書き方が異なることに気づくことができた。

・記事をもとにしたスピーチに取り組んだことで、文章をまとめる力や発表する力（思考力・表現力）が伸びてきている。

＜５年生の実践より＞

・グループでの話し合いをとおして、１つの記事について、さまざまな感想や考えをもつ友達がいることに気づいた。

・発表の機会を重ねることで、友達からの質問に分かりやすく答えられるよう、事前にインターネットでわからない語句の下調べをするなど、意欲的な取り組みが見られた。

＜４年生の実践より＞

・上級生の新聞カードを目標にすることで、意欲的にカードを作成した。

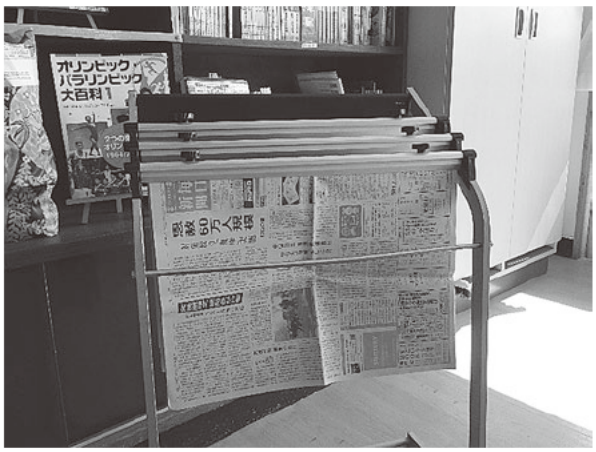
・記事の要点をまとめる学習は、国語科の要約の学習に役立った。

・新聞を見ながら写真や図表・見出しの位置や大きさを工夫して、社会科新聞づくりができた。

４　まとめ

新聞を活用した活動をとおして、これまで目を向けることのなかった新聞に興味をもつ児童が増え、情報を収集する新たなツールとして新聞がクローズアップされてきた。

来年度は今年度の学習状況を踏まえ、より積極的かつ効率的なＮＩＥの計画を立案し、実施へとつなげていきたい。



新聞に親しみ活用するＮＩＥ活動

市川市立新井小学校　　岩田　ありさ・大畑　祐美子・辻本　奈々子
清水　麻織・関根　香菜子・佐藤　千春

１はじめに

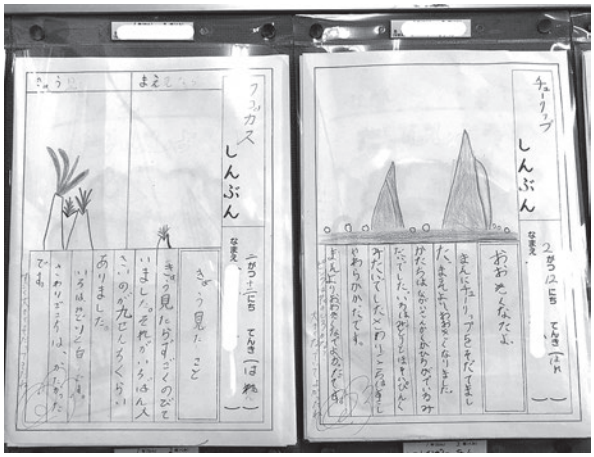
昨年度まで、本校では、各学級で個々に新聞を作成したり活用したりしていた。今年度、ＮＩＥの実践指定を受けるにあたりＮＩＥにはどのような活動があるのかを知り、積極的に新聞を活用した学習を取り入れることから始めた。

はがき新聞を見たことのない児童や新聞に興味を示さない児童など、新聞に対して関心が高い状況ではなかった。そこで、新聞を使った学習を通して、関心をもたせて新聞を身近に感じられるようにすること、無理なく学習の手段として新聞を活用できる方法を考えていくことに重点を置いて一年間の実践に取り組んだ。

２　実践状況

＜１年生＞

「○○しんぶん」作りや、新聞紙を使った体づくり運動を行った。



「○○しんぶん」作りは、主に生活科のあさがおや球根の観察日記として活用した。他にも、運動会や音楽発表会などの行事の振り返りのための絵日記としても活用した。

新聞紙を使った体づくり運動では、かけっこあそびやまねっこあそびを行った。

＜２年生年生の活動＞

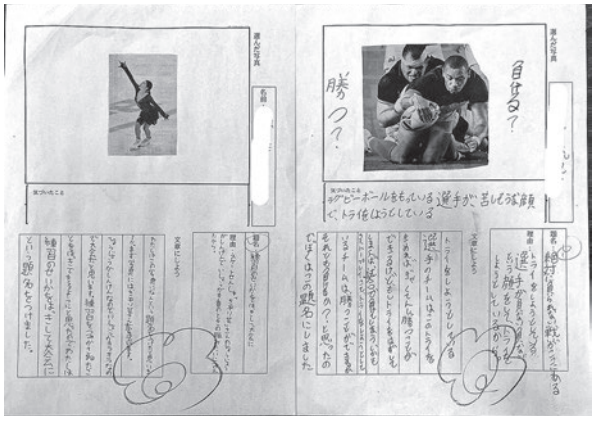
生活科の「町たんけん」の学習で、はがき新聞を活用した。探検してきた場所ごとに新聞にまとめた。また、発表では、壁新聞を作って発表した。継続的に個人新聞を作り、行事ごとに書いて廊下に掲示した。

学年活動で、新聞を使ってゲームをしたり、学級活動で、新聞の言葉集めをしたりと新聞に触れ合う活動も行った。

＜３年生の活動＞

社会科の「農家の仕事」の学習で、梨園見学を通して学んだことを新聞にまとめた。梨農家の方へ質問してわかったことをクイズにしたり絵やグラフを用いて読み手にわかりやすくまとめたりと、梨園見学の様子が保護者の方に伝わるような新聞を作成する活動を行った。

＜４年生の活動＞



国語科の「写真をもとに話そう」の学習で、新

聞を活用した。一般紙の写真から好きなものを選び、読み取ったことや想像したことを友達に伝えたり写真に題名をつけたりする活動を行った。

＜５年生＞

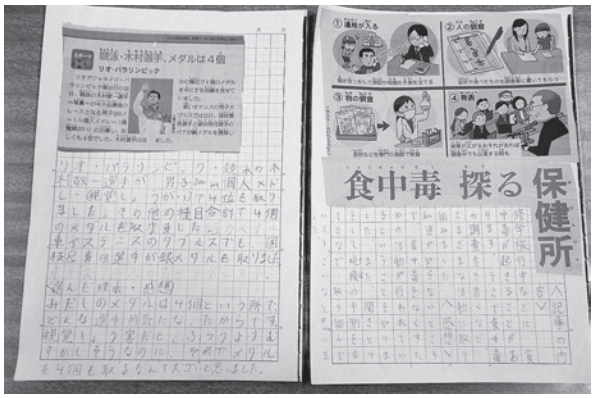
朝学習や宿題を通して「読売ワークシート通信」を活用した。

ワークシートでは、今、社会で起きている出来事についての記事を扱っており、その記事に出ている言葉の説明や、要点をまとめる活動、その記事に対しての自分の考えを書く活動を行った。

＜６年生年生の活動＞

教師の働きかけとして、朝の会や帰りの会に、その日学校に配られた新聞から児童が興味のありそうな記事を紹介し、その記事を教室に掲示することで、児童が新聞に触れる環境作りをした。

朝日小学生新聞から自分が興味ある記事のスクラップを行った。記事を要約し、感想や自分の考えを書きまとめた。



国語科では、「意見文を書こう」の学習で、新聞の投書欄を読み、テーマの見つけ方や、説得力のある書き方の参考使資料として使用した。

社会科の「長く続いた戦争」の学習では、朝日新聞の「知る広島」を配布し、児童に原爆について考えるきっかけとして活用した。

３　結果

○体つくり運動やゲーム活動に普段触れることの少ない新聞紙を使うことで、興味をもち、より楽しんで活動することができた。

○新聞作りを続けることで、縦書きの書き方に慣れることができた。また、段落を意識して文章を書くよい機会となった。

○年間を通して、新聞を書く活動を行っていたため、新聞の見出しや構成を考え、書くことが上手くなってきた。

○文章をまとめる力がついてきた。

○見たり聞いたりしてわかったことを文章や絵で表現してまとめる力が身についた。

○家庭学習でも自分なりの新聞を書く児童もおり、新聞に興味を持つ児童が増えてきた。

○内容を短い言葉でまとめ、読み手の関心を引きつける見出しを書けるようになった。

○新聞の写真だけを見ることで想像力を高め、それを言葉で表現できるようになってきた。
○自分が想像したことが記事とあっていたのか自ら記事を読み始める姿が見られ、新聞に興味をもつことができた。
○複数の情報を比較しながら読んだことで、自分の気になる情報を見つけようとしたり、そのことについてさらに調べようとしたりと文章を読むことへの意欲が高まった。
○記事を読むことで言葉の使い方や事実の伝え方を学ぶことができた。
○世の中の情報を知る機会が増えたことで、社会の出来事に興味をもち、いままで学習した内容を関連させたり、自分の事として問題を考えたりする児童もいた。
○国語の授業などで、要点を考えて読解することができるようになった。
○年間の活動を通して、新聞に親しむ機会が増えた。

４　考察

新聞に触れる機会が少なく、興味・関心が低い児童には、新聞を活用したゲームや遊びが効果的であった。

文字を読むことが苦手である児童には、「写真だけを見て」と制限を設けることで、どんな記事なのかが気になり、自から内容を読むきっかけになることが分かった。

１年を通して、記事を要約したり記録や感想を書いたりする活動をすることで、「書く力」と「読む力」を高められた。

活動をするだけでなく、新聞や特定の記事が児童の目に触れるような環境を作るだけでも関心を高めることができる。

５　まとめ

今年度は、各学年で形式にとらわれず、児童の実態に合った活動や単元の中でできる新聞活用、モジュールの時間を生かせる活動を考えて実践してきた結果、児童の新聞への関心を高めることができたと考える。

実践を通して、新聞の活用の仕方によって様々な力が育つことが分かった。例えば、個人新聞の書き方では、見出しの言葉を絞って記事の内容を伝えられたり枠のデザインや構成の仕方を工夫したりと、重点の置き方やねらいによって、より深い学びにつながっていく可能性があることが挙げられる。

若手教員の多い学校であるため、指導力が未熟であったり知識の幅が狭かったりするなど、課題も多い。一方で新しいアイデアを生み出しやすい環境でもあるといえる。

次年度からは、各学年の実践を共有し、親しみをもたせるだけでなく、より効果的に学力を高められるよう、系統を意識した実践や新しい活用の仕方などをさらに研究しながら、新聞を活用していきたい。

子供が新聞に親しむための工夫
～環境整備と学年１実践を通して～

千葉市立検見川小学校　　仲西　亮人

１　はじめに

本校は令和元年度からの２年間、ＮＩＥ推進実践校の指定を受け、初年度の取り組みとなる。

本校児童に、新聞を読む頻度についてアンケート調査を行ったところ、「毎日読む」が６％「週に１から３回読む」が22%「読まない」が72%だった。

そこで、１年目となる本年度は、「新聞に親しむ」ことをテーマとして、環境整備と学習に新聞を活用するという２点に重点を置き、実践することにした。２点を通して、児童が新聞を身近な物と感じることができるようにし、新聞に親しむ態度を育てたいと考えた。

２　実践内容

（１）新聞に親しむための環境整備

①図書室の新聞コーナー

図書委員会の児童が、毎朝、「今日の新聞」８紙を棚に用意し、新聞を自由に手に取って読めるようにした。休み時間になると新聞を手に取り、一面やテレビ欄、四コマ漫画等、自分の関心がある所を読む児童がみられた。

②新聞閲覧台

新聞閲覧台を設置し、校長先生、図書館指導員が気になった記事を掲示するようにした。毎日、記事を変えたことにより、関心をもって閲覧台をのぞきこむ児童が増えた。

③児童昇降口掲示板

各学年の教師が一か月交代で、社会で起きている話題性の高い記事や各新聞社が取り上げた記事の読み比べ、新聞クイズなどの掲示を行った。新聞記事に対しての感想の募集を行うと、感想だけでなく、自分の意見を付箋に書いて、掲示板に貼るという姿も見られるようになった。

（２）新聞を活用した学習活動

【第１学年　国語科】 学習内容を発展させる場面での活用

新聞から片仮名をさがしている様子

片仮名の言葉に赤鉛筆で丸をつけ、その後に、見つけた片仮名を短冊に書いた。「外国から来た言葉」「国名」「野菜の名前」「鳴き声や音」と種類ごとにわけた。

【第２学年　道徳】 教材としての活用

記事から自分の考えを記入している様子

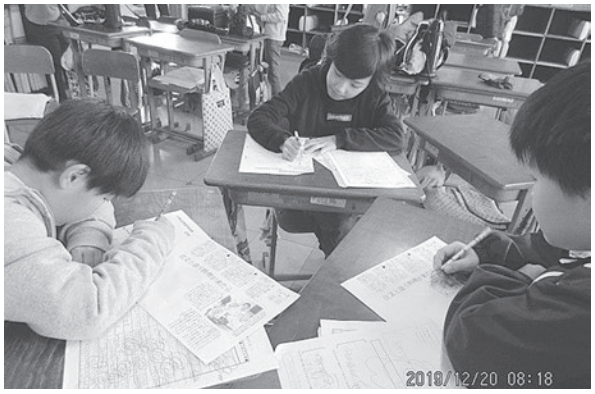
「ユニバーサルデザイン」の記事を道徳の学習の「思いやり」の教材として活用した。スーパーマーケットには、出入り口に階段とスロープがあることを知り、何でスロープがあるかについて考えた。車椅子の人や目が不自由で手すりがないと歩けない人のために設置されているということがわかった。

【第３学年　総合的な学習の時間】調べ学習のための活用

新聞から福祉について調べている様子

福祉にはどんな内容があり、何をするのかということを調べるために新聞を活用した。パラリンピックの記事や障害者に対する支援内容、高齢者、妊婦の為の福祉があり、色々な分野の福祉があることがわかった。

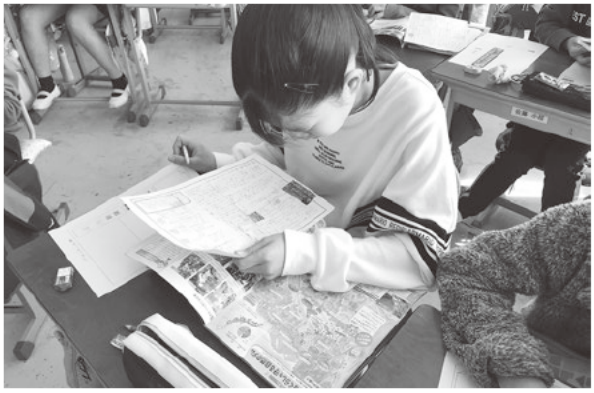
【第４学年　道徳】 教材としての活用



新聞記事をもとに話し合う様子

新聞記事の「注文を間違える料理店」を道徳の学習の「相互理解、寛容、広い心で」の教材として活用した。この記事は、認知症の老人が料理の注文を取ったり、料理を運んだりするが間違ってしまう。その状況でもお客は満足そうに食事をしているという内容である。このことから、小さい子、お年寄り、家族、友達にどのぐらい寛容な気持ちをもてるか話し合った。

【第５学年　社会科】表現方法を広げるための活用



自分の考えを新聞記事にしている様子

「わたしたちの生活と森林」の単元で、「森林資源の働きや国民生活とのかかわりについて新聞にまとめ、森林の保護、活用について自分達にできることを考え表現する」ということをねらいにした学習を行った。自分の考えを相手によりわかりやすくするための表現方法を学ぶために、新聞を読み、新聞の書き方について学習し、「タイトル」「見出し」「記事」「写真」があることがわかった。

【第６学年　国語科】 教材としての活用

自分の考えを新聞記事にしている様子

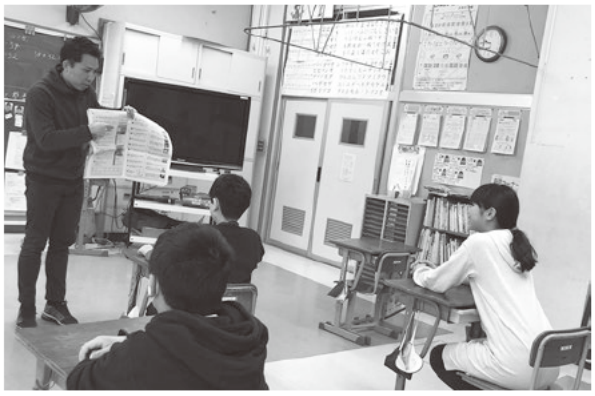
「意見文を書こう」の単元で、新聞記事の「ナイキの厚底シューズ」をもとに世間で話題となっている事柄について、「自分の考えの根拠を示しながら説得力のある意見文を書き、伝えることができる。」をねらいにした学習を行った。自分がテレビで見たり、親から聞いたりして知っていた事と新聞に書かれている事実を比較した。また、陸上競技だけでなく、他の競技でも道具に関する問題があることを知り、話し合った。

【特別支援学級　国語科】教材としての新聞活用

新聞から漢字を探している様子

「国語辞典の引き方」の単元で、新聞を活用し「国語辞典の使い方を知り、漢字の意味を調べることができるようにする」をねらいにした学習を行った。児童が国語辞典を意欲的に使えるようにするために、新聞記事の中から児童が知りたい漢字を３つ選び、調べる学習を行った。児童が調べた漢字は、友達の前で発表し、全員で調べた漢字を共有した。

【常時活動の取り組み】



①特別支援学級

毎週水曜日の朝学習では、「新聞タイム」の時間を設けた。新聞８社の中から見たい新聞を選

び、選んだ新聞の中から好きな写真を選んだ。自分が選んだ写真を友達に、「何でこの写真にしたのか」という理由も添えて発表した。また教師が記事を児童に読むという活動をした。

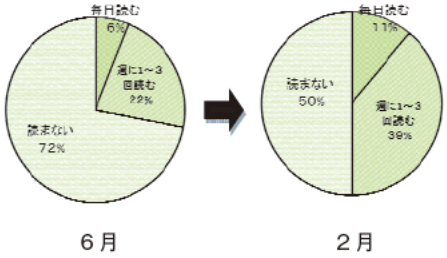
②4学年

毎朝、日直の児童２名が「新聞スピーチ」を行った。新聞３社から自分の気になった新聞記事を読み、自分の意見や感想を発表した。日直が発表するという方法にし、学級全員で取り組むようにした。

３　考察＜効果的だった工夫について＞

（１）新聞に親しむための環境整備

新聞に触れる機会を図書室に用意したことで、新聞を読む児童の姿が見られた。



その反面、図書室にあまり行かない児童にとっては、新聞を読む機会には繋がらなかった。児童が学校生活で一番長い時間を過ごす場所は、学級になるので、各教室に新聞コーナーを設け、新聞が生活の中で自然と視界に入り、手に取れる環境整備が必要である。また、新聞の価値を教師が学級の児童に知ってもらうための取り組みも必要である。

児童昇降口掲示板では、見る掲示と参加型の掲示で、どちらも新聞に親しむことをねらいにしていた。参加型の掲示では、親しむという姿以上に、記事に対して自分はこうしたいという意見までもつ児童の姿があった。新聞には、教師側のねらい以上の学びがあったと考えられる。今後は、児童昇降口のみではなく、学年掲示板にも参加型の掲示をし、より多くの児童が新聞に関わり、自分の意見をもてるようにしたい。

（２）新聞を活用した学習活動

新聞は学習の中で、学習内容を発展させる場面、教材としての場面、調べ学習としての場面、表現方法を広めるための場面と、いろいろな役割を果たしていた。今後も様々な教科・領域で実践を重ね、児童がわかる授業のための新聞の活用方法を追究したい。そして、教師が授業構成をする時の手法のひとつとして、新聞を活用できるようにしていきたい。

常時活動として取り組んだ新聞スピーチでは、実践した学級で全員が取り組み、期待感をもつ児童の姿も見られた。字を読むことが苦手な児童でも、写真を通して伝えることができた。字を読む事に対して、苦手意識がない児童は、記事を要約して伝えることができた。新聞は、児童の実態に応じた使い方ができることで、児童に合った学びにすることができると考えられる。今年度は２学級での実践だったが、２年目の取り組みでは、全学級で実践していきたい。

日々の実践に新聞を活用する
～館野小ＮＩＥ実践１年目の取り組み～

館山市立館野小学校　　栗山　徹

１　はじめに

本校の学校教育目標は「『新しい時代を切り拓く子ども』の育成～かしこく・やさしく・たくましく～」である。この教育目標を受け、研究主題を「主体的に自分の考えを表現できる子どもの育成～グループ学習・ペア学習・ＩＣＴ機器・新聞等の活用の工夫を通して～」と設定し校内研修に取り組んでいる。

２　実践内容

（１）１学期の取り組み

本校はＮＩＥ実践の指定を受け、１年目ということと、新聞が２学期から配達されるということで実践まで時間があったことから、「ＮＩＥとは何か」というところから研修をスタートさせた。初めにＮＩＥのウェブサイトやＮＩＥに関する書籍やＮＩＥ実践報告書をよりどころにＮＩＥが始まった経緯や学習指導要領との関連、ＮＩＥ実践校による新聞を活用した様々な実践事例等を紹介し、ＮＩＥの効果と実践方法について校内研修として全職員で学んだ。

また、普段どれだけ、新聞を読んでいるかについて実態調査を行った。その結果から、日常生活の中で新聞を手に取る機会が少ないことが分かった。そこで、１年目の取り組みとして、まず、子ども達が新聞に触れる機会を少しでも多くし、新聞に慣れ親しんでもらうことを目的として取り組むことにした。

（２）２学期以降の取り組み（実践）

①環境作り（新聞を読む場所・保管する場所の確保）

本校には部屋としての図書室がなく、廊下につながる広い空間をラウンジと称して少人数で本を読むスペースがあるだけである。また、新聞を保管する場所にも問題があった。そこで、気軽に新聞を手にとってもらいたいということからラウンジの本棚の上に新聞を置き、新聞を広げていつでも読めるようにした。

また、新聞を保管する場所としてオープンルームと称する空き教室の本棚を活用し、月ごとに新聞を入れるスペースを確保した。

②ＮＩＥコーナーの設置

新聞に慣れ親しめるように児童教室のある１階と２階にＮＩＥコーナーを作り、新聞に目を通す機会を増やした。

１階にはスポーツやコラム、週１回特集して

掲載している記事を取り上げて掲示した。写真やイラストやマンガなど慣れ親しみやすいものを取り上げたので、興味をもって見ている子どもが多かった。

２階には時事的な内容を掲示し、立ち止まってじっくり新聞を読めるようにした。特に館山市は台風15号の被害が甚大で、子ども達の身近な話題だったので子ども達もよく読んでいた。

③日常の実践の取り組みの様子

各クラスでは、授業や日常の活動の中で新聞を活用する取り組みを行った。低学年や特別支援学級では、図工の素材として新聞を活用した。新聞を切ったり、丸めたり、並べたり、手でちぎったりして子ども達は夢中になって制作に取り組んでいた。そして、新聞の素材の良さを活かして作品を仕上げることができた。

３年生では、国語科「まちの行事について調べよう」の学習で地元の新聞を活用し、市の行事について調べた。４年生では、社会科で消防署・警察署を見学し、学習のまとめとして新聞作りを行った。その際に各社の新聞の見出しや新聞の書き方を参考にした。そして、誰もが読みたくなるように見出しを工夫したり、イラストを活用したりして、わかりやすくまとめることができた。

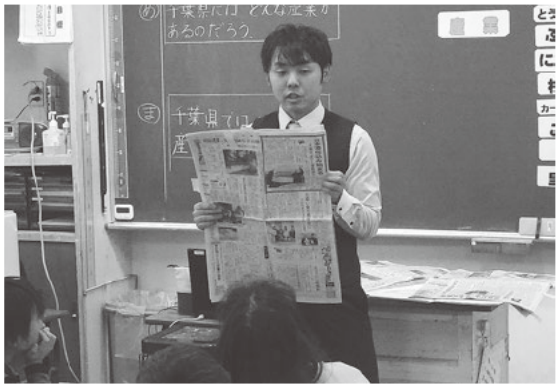
高学年では、社会科や食育、朝の会等で新聞を活用した。５年生の社会科「情報化した社会とわたしたちの生活」の単元では、各社の新聞を見比べ、同じ記事でも見出しが異なることや見出しの工夫などに気づくことができた。また、毎日朝の会のスピーチの中で、選択した新聞記事の内容を紹介し、その感想を発表する活動を行った。毎日行ったことにより、新聞記事の内容の要点をまとめ文章に書き表すことができ、要約の学習にもつながった。

６年生では、台風被害や新型コロナウイルスの記事について各社の一面記事を比較し、情報を読み取った。その後、ネットニュースとの比較も行い、何が大切な情報なのか自分で選び判断することが大切であることを学ぶことができた。また、食育の授業では、台風15号の影響で館山市給食センターが被害を受け、簡易給食になっている状況を新聞で紹介した。簡易給食の様子を数社の新聞社・テレビ局から実際に取

材を受け、その時に新聞記者の活動の様子も知ることができた。

④校内研修での取り組み

職員が高学年と低学年のグループに分かれ、学習指導案の検討を行い、各グループの代表の４年生と３年生のクラスで授業実践を行った。４年生は社会科「千葉県のすがた」の授業を行った。千葉日報を活用し、地元の産業についての授業を行った。地図や文章だけではわかりにくい千葉県の産業の特徴を新聞の写真や記事を活用したことで、わかりやすく学ぶことができた。



３年生では、各社の新聞を使って国語科「同じ部首を持つ漢字」を探す活動を行った。子ども達は、新聞をじっくり見て夢中になって同じ部首を持つ漢字を探すことができた。

全体協議の場では、各授業を教育事務所指導主事に参観してもらい、本時の指導の改善点や他の単元での新聞の活用方法について学ぶことができ、今後の新聞活用の可能性を広げることができた。

３　まとめ

ＮＩＥ研究指定１年目、今年度は「新聞に慣れ親しむ」ということをテーマとして取り組んできた。各学年で発達段階に応じて創意工夫をこらし、色々な場面で子ども達に新聞に実際に触れる、読む機会を設けた。子ども達は作品の制作に新聞を活かしたり、新聞の書き方の基礎を学んだり、読む視点を学んだりすることで新聞に親しむ素地を育むことができた。

４　考察

今年度、実際に新聞を活用した取り組みを行ったが、素材として使う、話のきっかけとして使う、写真を見せてイメージ化させる、漢字を探す等々、色々な場面で継続して使うことができるのが新聞の良さであることを学んだ。世間では新型コロナウイルスの感染拡大を受けて不正確な情報がネット等で拡散されトイレットペーパーが店頭で不足し必要としている人に渡らないという事態が起きた。その後、新聞記事にトイレットペーパーは「全量が国内生産である」という安倍首相の記者会見の内容が掲載された。新聞の情報スピードはインターネット情報より遅いが、新聞記者が取材をし、紙面を作成しているので情報の発信元が確かであり信頼性は高い。来年度は、研究指定２年目となる。新聞に親しむ環境を維持しつつ、本校の学校教育目標である「『新しい時代を切り拓く子ども』の育成」のために、教師が子ども達と新聞をつなぐ橋渡しとなり、必要な情報を正確に読み取り、冷静な判断力を身につけられるようにＮＩＥ活動に取り組んでいきたい。

「自分の考えを表現し、進んで学び合う児童の育成」
～言語活動の充実を通して～

船橋市立前原小学校　　野崎　敏之・那須　輝久・芳澤　比奈子

１　はじめに

本校は、昭和31年４月１日に二宮小学校から分離独立し、創立63年目を迎えている。JR 津田沼駅からは徒歩十数分の利便性のよい場所に立地している。児童数は近年800名を超える数で安定し、現在は児童数841名、各学年４学級のほか、特別支援級２を加え26学級である。児童の学力、規範意識は高く、地域や保護者は学校に協力的である。

平成24年度から船橋市教育委員会より研究課題を「言語活動の充実」とした５年間の研究指定を受けた。29年度以降も今年度に至るまで国語科で「言語活動の充実」につて研究を重ねている。

令和元年・令和２年度ＮＩＥの実践校となり、５年と６年でＮＩＥを研究した。研究するに当たり平成24年度から取り組んでいる「言語活動の充実」をＮＩＥにも取り入れ、主に国語科と社会科で研究を進めた。1学年あたり4クラスあるので様々なクラスで授業を行いＮＩＥの効果を検証することができた。

２　実践状況

○５年生

＜「情報ノート」の継続的な作成＞

５月から継続して「情報ノート」の作成を行ってきた。新聞記事の中から自分の興味のある記事をスクラップし、その記事の内容の要約とそれに対する自分の考えを書くという活動である。

＜新聞の投書欄を活用した授業の展開＞

意見文の書き方を学習することをねらいとして、単元学習「届け！我らの声～投書を書こう～」という授業を展開した。新聞の投書欄を見て、投書とは何かを知るとともに、世の中にはこのように自分たちの声をたくさんの人に届ける場があるということを知った。そして、そこに掲載されている投書から、意見をわかりやすく人に伝えるためにはどのように文章を書いたらいいのかを分析し、その分析を基に、実際に自分たちも投書として意見文を書いた。投書のテーマは、各児童の興味に合わせて、それぞれである。児童たちの意見を基に、児童たちの関心が高くてたくさんの意見が出そうなものを教師側である程度厳選し、その中から各児童が書きたいテーマを選択し、投書を書いた。その後、書いた投書を基に児童たちが意見交換を行う場も設けた。

○６年生

＜気になった記事紹介＞

毎朝の学級活動の時間を利用し、新聞記事から関心をもった記事を紹介する活動を行った。ニュースで話題になった出来事を詳しく記事で紹介したり、社会科や理科で学習したことに関連した記事を選んで自分なりの考えを発表したりした。

選んだ記事はペンで囲み掲示しておいたため、発表後に改めて目をとめたり、切り取って持ち帰り自主学習に生かしたりする児童も見られた。

＜国語「意見文を書こう」＞

生活の中から課題を見つけ、問題解決のために自分なりの意見をもち、説得力のある文章を書くことをねらいとした学習を行った。独りよがりの

考えではなく根拠をもった主張とするために、図書資料やインターネットの活用と共に、新聞記事からも様々なデータや関連記事を探して用いた。

＜社会科「わたしたちの生活と政治」＞

自分たちのくらしをより豊かにしたり問題を解決したりするなどの願いが、どのように実現されているか調べて探っていく単元である。

朝の学活で行っている記事紹介で身近な公共施設の建設について見つけたり、税金の使われ方の記事を切り抜いてきたりと、児童が自主的に新聞を活用する姿が見られた。

また本紙だけでなく、市や県の広報も利用することで、より政治を身近に捉えられるようにした。

３　結果

○５年生

＜「情報ノート」の継続的な作成＞

継続してこの活動を行うことにより、児童たちが新聞を手に取ることが自然になっていった。それとともに、記事の要約を継続して行っていくことで、文章の要旨を読み取る力がついた児童が多く見られた。また、記事に対しての自分の考えを書くことを継続して取り組んだことにより、個人差はあるが、物事に対して自分の考えを持つという意識が育ち、自分の考えについても考えが深まっている様子が見られた。

＜新聞の投書欄を活用した授業の展開＞

この学習を行ったことで、投書というものがあるということを知った児童が多数であった。投書によっては自分たちと同年代の人の意見が新聞に掲載されおり、自分たちの声をたくさんの人に届けることができることを知った。授業の中で扱った記事の中には、学生の意見で世の中が動いたという一例もあった。児童たちは、自分たちの声を届けるための場があったり、そうした意見で世の中が動くこともあったりすることを知り、意見文を書くことへの意欲が高まった。

投書を分析したことにより、意見をわかりやすく人に伝えるための文章構成を学び取ることができた。自分たちが投書を実際に書くときにも、学習した文章構成で文章を作成し、整理されたまとまった文章を書くことができるようになった。意見文を書く上で、根拠を明らかにして書くことも大切であることも多くの投書から学び取り、自分たちが書いた意見文にも意見となる根拠を書くことができた。

○６年生

＜気になった記事紹介＞

日常の会話や授業の中でも、新聞から得た情報や社会に対する問題点などを話す様子が見られた。また、常時３紙を並べて掲示していたことで、「どれも○○のことが１面だ」、「○○新聞にはこう書いてあるけれど△△新聞はちょっと違う」など比較する児童も少数だが見られた。

＜国語科「意見文を書こう」＞

時事的な課題を選んだ児童にとっては、新聞の記事が参考になっていた。本文だけでなく、グラフや図での説明なども、児童にとってわかりやすい資料となっていた。反面、タイムリーではない課題を選んだ児童は、その時期に手に取れる新聞記事に自分が求めるものを見つけることが難しく、図書資料やインターネットの情報を利用していた。

＜社会科「わたしたちの生活と政治」＞

新聞記事紹介では１面やスポーツ面を紹介することが多かったが、この学習を通して、地域面を読んだり政治面を目にしたりした。国会や裁判など、学んだことが実際に行われているという事実に触れ、政治をより身近に感じることにつながった。

４　考察

○５年生

本年度の取り組みを通して、新聞を活用することにより、児童には様々な力がつけられた。しかしそのために大切なのは、教師がその機会と時間と手段を児童にしっかりと与えてあげることが大切であると考える。

「情報ノート」の取り組みとその結果を見てみても、要約する力や物事について意見を持ち考え深める力がついてきているのは、継続的に行ったからこそであろう。最初のうちは、新聞を手に取ることさえ消極的であった児童もいた。しかし、継続して取り組むことにより、新聞を手に取ることがあたりまえになり、情報がたくさんある中から情報の要旨を読み取ったり、自分に必要な情報を選択したりすることができるようになり、要約文が書けるようになり、自分の考えが書けるようになったりと、時間をかけて継続することにより付いてきた力であろう。

新聞は情報の宝庫であり、教材としても非常に魅力的である。しかし情報がたくさんあるからこそ、それに触れる機会と時間とその手段を児童に与えてあげることが必要である。教師がつけたい力のねらいを明確に持ち、そのための手段をよく考えて児童に提示していくことが大切であろう。

これからも児童たちには継続的に新聞に触れる機会を設けていきたい。情報処理能力や社会的な情報、物事に対して意見を持つこと、それを表明するなど、どれもこれからの社会を児童たちが生き抜いていく上で大切な力であると考えている。それらの力をつけていくためにはどのように新聞を活用していけばよいのか、その手段をしっかりと考えていきたい。

○６年生

毎日、新聞が届き手に取れる環境であったために、ここに記した教科だけでなく、様々な学習に自分たちの「いま」を感じることができた。ニュースや情報番組で話題になったことを、翌朝学校で「この記事だ！」と新聞と一緒に教えてくれる児童も多くいた。

いま、新聞を購読している家庭は少なくなり、子どもたちは情報の多くをテレビやインターネットで断片的に知る程度である。そのような情報は刹那的で流れていってしまうことが多い。しかし新聞を活用することで、事実をより詳しく知り、深く考えるきっかけとなったのではないか。聞き流す情報ではなく、情報や様々な人の考えを「読む」という活動が、児童だけでなく我々教職員にもさらに必要となってきていると感じた。

５　まとめ

令和２年・３年度ではＮＩＥに加え主権者教育の研究奨励校となった。来年度はさらに多角的な視点から本研究を進めて行きたい。

情報化が進む現代では無数の情報を紙媒体やインターネットから得ることができる。その情報の有用性を見極め、取捨選択していく能力がこれからの児童に求められると感じている。

ＮＩＥを用いた研究で児童は情報に対する興味や関心を高めることができた。さらにはその情報に対して自分の考えを持つことができるようになった。

新聞では日々変わる社会情勢について知ることができる。児童は日々変わる社会情勢を自分事として捉え考え、意見を発信することができるようになった。

次年度では今年度の取り組みを継続し、児童に新聞に触れる機会を作り、よりよいＮＩＥの活用を研究していきたい。

「議論したがる中学生」

鎌ケ谷市立鎌ケ谷中学校　　大塚　功祐

1　はじめに

授業において、話し合い活動や議論する機会をたくさん作りたいが、なかなか頻繁に実現できないと感じていました。原因は以下にあると考えました。

・教材を準備する時間がない。
・教科書をやり残しなく、全て終わらせるために時間がない。
・話し合う材料をどうやって集めればいいのかわからない。
・入試を意識すると、議論よりも受験指導に力を入れてしまう。
・議論を促しても、生徒たちだけで議論できないのではないかと思っている。
・話し合いで本来の趣旨からそれて、意味がなくなってしまうと心配している。

などが考えられます。しかし、新聞を活用すれば上記の原因が解決できました。具体的な実践事例を報告します。

2　実践状況

（1）ディベート

生徒に提案すると「エーッ、やだな」という反応が返ってきます。ところが、いざ準備をしてみるとグループごとに生き生きと取り組んでいました。

テーマ

「死刑制度を廃止すべし」
「大きな政府と小さな政府どちらが理想か」
「夫婦別姓を認めるべし」

グループ編制

男女混合6名くらい（ふだんの生活班）
※6グループ（3テーマ×肯定側、否定側の2グループ）

実施時期

2月の前期選抜後～2月下旬
※社会科の総まとめとして実施。受験真っただ中の取り組みでしたが、実施後のアンケートで98％がディベートをやってよかったと回答しました。

準備

1時間目　ディベートについて説明
　　テーマ決めなど
2時間目　班ごとに新聞記事とタブレットを渡し、下準備
※関連記事は、朝日新聞の「Teachers’メール」や普段から切り取っていた記事を活用。平等に両グループに同じ記事を渡しました。

実施

毎時間1テーマ
（肯定グループ、否定グループ以外は審査員）

「相手の考えに納得できる部分もあり、さらに調べてみようと思った」「考えていることを表現する難しさと面白さを知った」などの意見がありました。多面的・多角的に物事をとらえ、相手の考えを尊重すること、自分の考えを持つこと、考えを表現することなどを育むことができました。

（2）参院選模擬投票

2019年7月に行われた参院選に向けた事前学習、模擬投票を新聞を活用して行いました。

事前学習

公示後すぐの授業(2時間分)

公示後翌日の新聞各紙の一面は今回の選挙の争点がわかりやすくまとめられているので生徒の理解を助けました。合わせて、公示日の党首第一声を配り、どの主張がどの政党の主張かクイズ形式で考えました。

政策ごとの比較記事を活用し、各政策の優先順位を班ごとに検討しました。また、政策比較表を作成し、自分と政党の相性を探る時間を作りました。

模擬投票

3学年を対象に放課後に実施。鎌ケ谷市選挙管理委員会にご協力いただき、選挙公報を生徒分ご用意いただき、模擬投票に至りました。自由投票でしたが、投票率は90％を超え、関心の高さをうかがえました。

（3）日常的に新聞を活用

以上の取り組みを突然行うのでなく、日ごろから新聞を身近に感じる取り組みを行っていたことがより効果を高めたと思いました。

①廊下などに新聞を掲示

話題のニュースを掲示しました。生徒自身が考えてほしい記事を抽出し、定期的に更新しました。

社会科で毎回定期試験に出題される時事問題対策のために読んだりする姿がみられました。

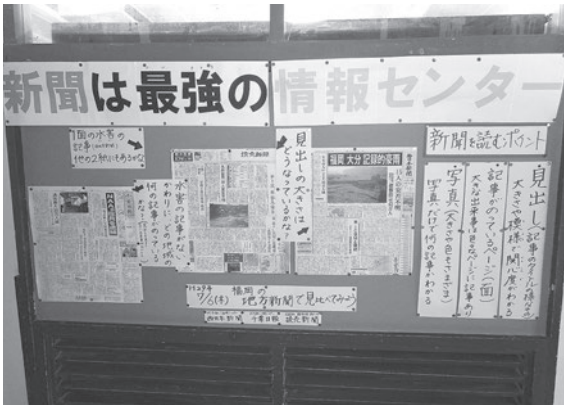
新聞係を作り、生徒が興味のある記事を貼ってもらう取り組みも行いました。

②記事に対する意見文を書く

話題の関心のある記事を授業で読み込み、意見文を書きました。新聞社に投書し、生徒の投稿が掲載されることもありました。

③図書室との連携

前年度に引き続き、司書の大久保佳代子先生



にご協力いただき、図書室からＮＩＥの魅力を発信していただきました。

図書室前廊下に紙面の比較ができるように掲示しました。その日の出来事の取り上げ方の違いを知れるようにしました。

図書室に行くと、新聞社ごとに、日付順に整理されており、生徒が気軽に新聞に触れられる環境を整えていただきました。

司書の先生にお忙しい中、ＮＩＥに関するお願いをするのは、ためらいがありましたが、とても協力的で生徒たちのために熱心に活動を支えていただきました。

3　まとめ

生徒たちは社会の出来事に対して、意見や考えを持っていないわけではないと感じました。知識が足りないと思い込んで、自分の考えを伝えよいのか躊躇しているだけなのかもしれません。

議論の機会を提供すると、誰一人欠けることなく、熱心に話し合いをします。時には感情的になることもありましたが、「心は熱く、頭は冷静に」を合言葉に、理論的な話し合い活動ができるまでに成長したと思っています。

そのためには新聞は必要なツールです。生徒の議論を促すために、時間も手間もかけることなく簡単に行えます。議論の時間を頻繁に確保できるようになり、授業が活性化しました。また、社会と自分をつなげるだけでなく、生徒の考えを深める大きな役割を果たしていました。

深い学びを育てる新聞活用のあり方

香取市立小見川中学校　　松井　初美

１　はじめに

本校は指定校になる以前から新聞活用の取り組みを行っており、本年度よりＮＩＥ実践指定校となった。毎年４月の最初の授業で新聞に関するアンケートをとっている。そこから年々新聞購読をしている家庭が減っていることがわかる。けれども「新聞を読むことは必要か」という問いに、購読していない家庭の生徒も「必要である」と答えている生徒が多い。「インターネットで簡単にニュースを見られるが、じっくりと記事を読むためには新聞は必要である」「新聞をめくりながらいろいろな情報を得ることができる」と新聞を読む価値を見出している。今回指定校となり、８紙が読み比べできるメリットを生かしていくと同時に、新学習指導要領を見据えた新聞活用を考えて実践してみた。

２　実践状況

（１）新聞コーナーの設置

本校は、各学年のフロアにオープンラウンジがあり、そこに学年ごとに８紙を分けて新聞コーナーを設置した。ラックに新聞を入れ替える作業は図書委員の活動とした。昼休みや休み時間に手にとって新聞を読んでいる生徒の姿が見られた。ラックから外した新聞は新聞社ごとに仕分けし、過去の新聞も読めるようにした。

（２）授業での取り組み

１年生

①新聞スピーチ(社会)

授業の最初に新聞スピーチを行った。気になる記事をワークシートに貼り、それをクラスメイトに紹介した。社会の出来事に目を向け、それに対する考えをしっかりともっている様子がうかがえた。

②今週のニュースをまとめる(国語)

新聞を読んで気になる記事について文章でまとめ、読み合う学習を行った。５Ｗ１Ｈを意識してニュースの情報をまとめることができた。

③１つのニュースを追いかけて(国語)

気になるニュースに関する記事を１週間追いかけて読む学習を行った。台風被害などの災害のニュースは日を追うごとに段々と被害の状況が詳しくわかってくる。そのことに気付きながら読むことができた。

２年生

①朝学習での新聞活用

隔週でコラムの視写を行った。

・教師が読ませたいコラムを選び、ワークシートを作成する。

・読みながら気になる部分に線を引かせる。

・わからない語句を辞書で調べる。
・視写をする。
・コラムの見出しを考える。
・コラムに対する意見や感想を文章で書く。

1年の後期から続けているので、視写する時間も徐々に短くなり、コラムに対しての意見もしっかりと書けるようになった。

②新聞の投書記事を書く（国語）

教科書に「新聞の投書記事を書く」という題材があり、新聞の投書記事を参考に投書文を書く学習を行った。序論の問題提起で自分の立場を明確にし、本論、結論と仕上げていった。実際に新聞社に投書記事を送付した。

③新聞記事を読み合う（国語）

「新聞ツィッター」と題して、気になる記事にコメントを書き、他の人にも紹介してコメントをもらうという学習である。1時間じっくりと新聞を読む時間をとることにより、いろいろな記事に関心を向けている様子がうかがえた。

【授業の進め方】
・新聞を読んで気になる記事を蛍光ペンで数多く囲んでいく。
・その中でみんなに紹介したい記事を１つ選び、切り取りワークシートに貼付する。
・ワークシートに新聞名、発行年月日を記入する。
・記事をもう一度読み、気になる部分、みんなに読んでほしい部分に蛍光ペンで線を引く。
・記事を読んだ自分の考えをワークシートに吹き出しで書き込む。
・グループ内で記事を紹介して、付箋紙につぶやきを書いてもらい、自分のワークシートに貼る。

３年生

①短学活での新聞スピーチ

朝の会で気になるニュースについてスピーチを行った。

②新聞広告の活用（国語）

教科書に「広告を批評する」という題材があり、新聞広告を導入に活用した。全面を使った新聞広告にはインパクトのあるキャッチコピーが使われている。キャッチコピーの効果や役割について興味・関心をもって考える一助となった。

（３）新聞記事を定期テストに活用（国語）

条件作文の題材や説明的文章の読み取りで新聞記事を使って問題を作成した。

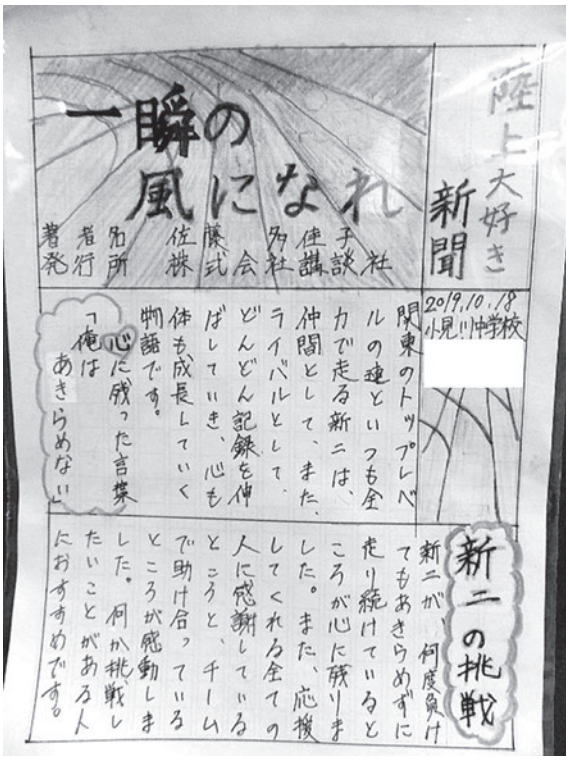
（４）学校全体での取り組み

①学習新聞の作成

・１年生は遠足、２年生は宿泊学習、３年生は修学旅行の事後学習として各自で新聞を作成した。
・読書推進の一環として、お薦めの本のはがき新聞を作成し、文化祭に展示した。

②今年の10大ニュースを考える。

12月の授業で日本の10大ニュース、海外の10大ニュースを考え、新聞社に応募した。



３　成果と課題

（１）成果

・以前から新聞を活用した授業を行っていたが、実践校となって８紙が配達されることにより、読み比べができるようになった。
・２年生の視写は、１年時の９月から始めたが、徐々に読んだり、書いたりするのが速くなった。また的確に内容を捉え、感想や意見を書くことができる生徒が増えた。
・実践校になってから複数の先生が新聞の活用を考えるようになった。

（２）課題

・８紙をまとめて取るのではなく、実践内容や実践の時期に合わせて分けて取ったほうがよい。
・各階に分けて新聞コーナーを設置したので全国紙の読み比べが難しかった。新聞コーナーを工夫する必要がある。
・限られた教科だけの実践になってしまったので、もう少し広める工夫が必要である。

「新聞から多角的に日々を読み解く」

柏市立手賀中学校　　伊藤　昌子

1　はじめに

本校は市街地から離れた自然豊かな環境にある、全校生徒96名の小規模校である。地域の方々の温かいご協力に支えられ、「気力に満ちた人間性豊かな生徒」の育成を学校教育目標に掲げている。柏市は授業でのICT活用、図書館活用に力を入れている。学校図書館には指導員が1校1名配置され、資料の管理や授業支援を行っている。

近年、新聞を取らない家庭も増えており、ニュースを得る手段がテレビやネットに偏りつつある。そこで、ＮＩＥ実践指定校1年目の本年は、世の中の出来事や身近なニュースに目を向けることを目標とした。生徒が新聞を身近に感じることと授業での活用を柱として取り組んだ。

2　実践状況

（1）「閲覧コーナー」と「気になる記事」

生徒が日常的に新聞に触れられるよう、2つのコーナーを設けた。閲覧コーナーは生徒が利用する廊下に設置し、朝刊と前日の夕刊を置いた。月替わりで毎日３～４紙が届くので、記事の読み比べができてよかった。閲覧コーナーには蛍光マーカーを置き、気になる記事に線を引いたり囲んだりできるようにした。生徒は休み時間や歯磨きタイムに新聞をめくっていた。

生徒がマーカーを引いた記事や教職員が選んだ注目記事を切り抜いて、「気になる記事」コーナーに掲示した。掲示は日々更新し、常に新しい情報に触れられるよう心がけた。

さらに、「SDGs（持続可能な社会）」に関する記事は社会科、理科、技術・家庭科など教科を横断して関連づけられることから、別にコーナーを設けて掲示した。

また、元号が「令和」に変わった時には出典になったとされる『万葉集』を一緒に展示するなど、学校図書館も協同して知的好奇心をくすぐるしかけを工夫した。

（2）授業での取り組み

①1年社会「世界の諸地域」

導入として、紙面から国名を探し出し地図で位置を確認した。続いて、グループごとに5つの国を選び、国ごとの特徴を調べてランキング形式で比べる課題に取り組んだ。

地図帳や図書、PCを使って調べ、グループごとに発表した。

②2年国語「夏の葬列」

太平洋戦争時の疎開を題材にした単元を学習後、夏休みの課題として戦争関連記事のスクラップを行った。家庭で新聞記事に接する機会がない生徒は、学校図書館で保管している新聞から切り抜いてもよいことにした。学校図書館は夏休みも数日間開館しているので、記事を探しに来館する生徒もいた。2学期最初の授業では選んだ記事の概要を説明し、そこから考えたことを発表し合った。

③3年社会「労働問題」

導入として、新聞の求人広告を使用した。賃金や勤務時間など、生徒は自分のこととして職業を選ぶ際の観点を意識したようだった。

取り組んだ課題は、「日本が抱える労働問題について考える」というもので、流れは以下の通りである。

・労働に関する記事を探す。

・記事を読み込む。

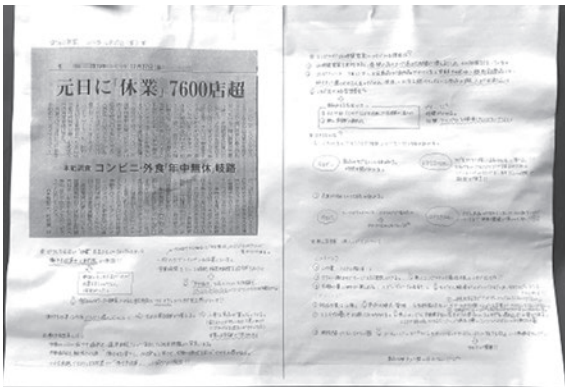
・記事からわかったこと、疑問点をまとめる。

・PC や図書を使ってさらに調べる。

・自分の意見を書く。

・全体に向けて発表する。(記事の内容・意見)

生徒が取り上げた記事は、労働時間やハラスメント、雇用形態、外国人労働者などについてであった。新聞は4紙を数か月分保管しておいたものを使用し、図書はニュース年鑑や学習年鑑、データブック、キーワード事典などが役立った。



3　成果と課題

（1）成果

前年にＮＩＥアドバイザーの出前授業を受けたほか、国語科でも新聞記事を活用した授業を行っていた。その流れで1年目のＮＩＥ実践に取り組んだが、学校の中に新聞があることが当たり前になってきたと感じる。毎日欠かさず紙面をチェックする生徒や、掲示された記事について数人で話している姿を見られるようになった。

また、授業では生徒自身が新聞記事を選ぶことから始めることで、生徒が主体的に課題に取り組むことができた。文章の読解や探究活動の得手不得手にかかわらず、それぞれのスキルに合わせて前向きに取り組む姿が見られた。そして、まとめの発表を聞きあうことで、調べ方や考え方の多様性を学び合うことができたように思う。

（2）課題

自由に新聞を閲覧するだけでは生徒による「気になる記事」が集まらず、切り抜きが職員によるものに偏ってしまった。次年度はもっと生徒が主体となる活動にしていきたい。

授業実践では国語科と社会科での活用に留まった。今後、国語科では投書など発信する取り組みを取り入れていきたい。また、他教科でも活用が広がるよう教職員への呼びかけを強化するなどして、学校全体での取り組みになるよう、次年度の活動につなげていきたい。

ＮＩＥタイムにおける日刊工業新聞の活用

千葉県立成田国際高等学校　　石毛　一郎

１　はじめに

実践校に届く新聞の中で、日刊工業新聞（以下、工業新聞）はあまり馴染みのない紙面かもしれません。みなさんの学校ではどのように使っていますか？　本校では、地理Ａや地理Ｂの学習単元に合わせて活用しています。授業の冒頭に約5分間で設置しているＮＩＥタイムで工業新聞（関連して日本経済新聞も）を読みます。

２　ＮＩＥタイムの設定

地理の授業は選択科目のため、普通教室ではなく専用教室で行っています。教室後方には、新聞社別に最近の紙面を積んでおきます（写真）。生徒は休み時間中に好きな新聞を取り着席します。最初の4分間で紙面を読みます。授業開始のチャイムが鳴る前から読み始める生徒もいるので、号令も止めることにしました。座席は2人組の長机であり、最後の1分で自分が気になった記事を取り上げ隣の生徒へ説明します。奇数日には左側、偶数日には右側に座っている者が担当します。

本校では約８割の生徒の自宅で新聞を購読していますが、ほとんど読む習慣は無いようです。日々の生活が忙しい、慌ただしいからとの理由を挙げる者が多いです。しかし、授業でＮＩＥタイムを設定すると、とてもよく読みます。授業評価のアンケート調査では、「新聞を読む習慣ができてうれしい」「入試で小論文があるので勉強になる」「もっと長く読みたい」「教室でも読みたい」等の声も寄せられました。

他人に説明することについては、多くの生徒が肯定的な感想を述べています。「自分も真剣に読むようになった」「分かりやすい説明をするために考えるようになった」などの他にも、「自分自身のことや地元地域のことと比較して記事を読む習慣がついた」「教科書のどこに関係があるのかを意識しながら読むようになった」などの発展的な意見も寄せられています。

３　工業新聞の活用方法

「工業」と聞くと難しいイメージを持つ生徒も多いですが、紙面では工業をはじめ、新製品の情報や、産業全般の話題も展開されます。生徒はかなり興味深く読みます。「コンビニの最新情報も載ってるよ」「リケジョ（理系女子）の連載は面白いね」など、読みやすい記事から入ることで、次第に専門紙を読むことへのハードルも低くなるようです。カラー写真が多く、平易で分かりやすい文体も、子ども達には読みやすくて好評です。

工業の学習単元は約7時間です。「工業立地」の項目では、原料・市場・労働力・集積・交通の各指向型の工場分布を学びます。工業新聞には、ビール工場の話題もよく掲載されます。そこで生産される清涼飲料水の動向は、生徒にとって身近な話題であり興味を示します。

「世界の工業地域」の項目では、先進国からアジア NIEs、BRICS などの工業生産の特色を学びます。他の項目と同様に、発展著しい中国に関する記述が目立ちます。工業新聞にも、中国の工業や産業に関する話題が紹介されます。教科書では詳しく書くことができない具体的な企業の生産形態の記述は、生徒も現実味を感じながら読むことのできる話題です。

「各種工業の特徴」の項目では、繊維・石油化学・鉄鋼業・電気機械など代表的な工業分野に関して国内外の事例が紹介されます。中でも自動車工業は、子ども達が日常生活に結びつけて理解しやすい分野です。国内における新車販売の情報や、海外における自動車生産の様子などに興味をおぼえる男子も多いようです。

「日本の工業」の項目では、貿易摩擦や産業空洞化など国際化が進む中で日本が置かれた状況や課題を紹介しつつ、日本が世界をリードするコンテンツ産業に関する記述も目立ちます。工業新聞にも、アニメやゲームなどが紹介され、日本作品の国際競争力の高さをあらためて感じさせてくれます。

4　おわりに

前述したアンケート調査の中に次のような感想がありました。（原文ママ）

「工業新聞を読むのが楽しみでした。ぼくは省エネルギー産業や電気自動車にとても興味があります。環境がますます悪化する世の中で、少しでも早く地球環境に優しい省エネルギー産業の発展を願っています。将来は自分も貢献したいです。」

今年度実践では、地理の工業の学習時間に工業新聞を読ませましたが、多岐にわたる紙面内容は、地理学習の他の単元にも関連することも多く、年間を通した活用も十分に可能であると考えています。

指定期間が終わると学校に新聞が届かなくなります。全国紙や千葉日報は校内で購読しているものを数日遅れで授業に活用することは可能です。しかし、工業新聞や日経新聞を購読する学校は無いので、どのように紙面を用意したらよいかを思案しています。

推進協議会や各新聞社の方々からもご教示いただけましたら幸いに存じます。

ＮＩＥ教育実践

昭和学院秀英中学校・高等学校　　出口　郁子

１　はじめに

本校は、ＮＩＥ実践校として２年目の１年であった。そこで、昨年度の反省も生かしつつ、より良い取り組みができるように心がけて臨んだ。

２　実践状況

本年度は、中学校１、２年生、高等学校２年生において、週１回の総合的な学習の時間を活用して、ＮＩＥの取り組みを行った。

＜中学１年生＞

中学１年生では、２学期、３学期の「総合的な学習の時間」を利用して、新聞作りを行った。

はじめに、新聞記事を読んで、「新聞とはどのような構成になっているか」を学習した。見出し→要約→詳細→意見などの順に新聞記事が構成されていることを実物に触れながら確認することができた。

次に、生徒自身が興味を持ったテーマについて、記事を書くことを課題とした。まず、記事にしたい内容について、インタビューを行ったり、写真を撮ったりして情報を収集することから始めた。例えば、「日本文化の発信」をテーマにした生徒は、本校の卒業生で「全国通訳案内士」の仕事をしている方へインタビューを行った。仕事の内容について、全国通訳案内士になるためには何が必要か、大変なことややりがいについてなど広い範囲にわたってお話を伺った。また、「お茶を世界に広める」をテーマにした生徒は、外国人向けのお茶会や、手話を使って障がい者向けのお茶会を開いている方に、インタビューを行った。茶道道具や茶道の歴史など、文献で調べられることだけでなく、茶道の先生から生の声を聞くことができたのは生徒にとってもよい経験になったのではないかと思う。

次に、実際に新聞記者になったつもりで、新聞記事を書く作業に入った。はじめに学習した「記事の構成」を真似てみながら、５、６時間を使ってＡ４サイズで１枚の記事をまとめあげた。インパクトのある見出しや見やすい段落構成などを工夫していた。資料１は生徒の作成した記事である。

最後に、生徒の記事をまとめて冊子にし、３学期の終わりに保護者も参観可能の総合発表会で発表をする予定であったが、残念ながら新型コロナウィルスの影響で、発表は延期となった。

＜中学２年生＞

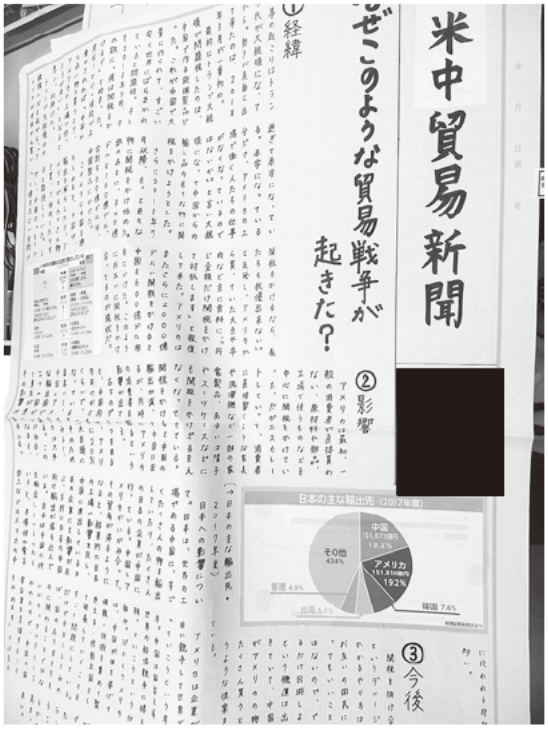
中学２年生では、１学期の「総合的な学習の時間」を使って、新聞づくりを行った。中学２年生では昨年度も同様の取り組みを行ったので、生徒も新聞記事を読むことに抵抗がなく、スムーズに始めることができたように思う。

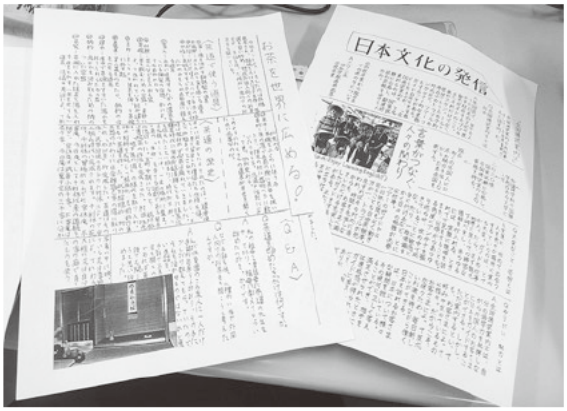
はじめに、導入として『コンビニは24時間必要か？』という議題を提示し、これに対する意見

を書かせた。このテーマに関して、新聞記事を集めたり、グループで話し合ったりして、その後意見がどう変わったかを議論した。

次に、各自が興味を持ったテーマについて、新聞記事を集めてくることを課題とした。こうすることで、新聞やニュースに全く興味がない生徒についても、家で新聞を広げたり、ニュースを見たりする機会をつくることができたのが良かったと思う。

このようにして集めてきた新聞記事をもとに、それぞれが選んだテーマに沿って、Ａ１サイズ１枚の用紙にオリジナルの新聞記事を作成した。この際、生徒が選んだテーマごとに、環境系、経済系、政治系、科学系、国際系など大きくジャンル分けをし、クラスの枠を超えて、同じジャンルの生徒同士が同じ場所に集まって作業をするようにした。これによって、生徒同士でも議論が活発になったり、アドバイスをする教員も、それぞれが得意とする専門分野について指導ができるようになったりしたこと効果的だったと思う。生徒が選んだテーマは多岐に渡っており、例えば、「ゲノム編集」、「働き方改革」、「米中貿易戦争」、「テロとＳＮＳ」、「災害」などがあった。こうしてできた新聞が資料である。





最後に１学期の総括として、クラスで発表を行った。わかりやすい新聞を作るだけでなく、わかりやすく伝える力を育成することができたのではないかと思う。

＜高校２年生＞

本校の高校２年生では、２、３学期の「総合的な学習の時間」に、各教員が自らの専門分野について、ゼミを行っている。生徒たちは興味のあるゼミを選択し、そのゼミのなかで特定の分野についての見識を深めていくことを目的としている。このうち、新聞を活用したのは、国際政治のゼミである。

はじめに、教員による講義が行われるが、ここでは、毎回、新聞記事１枚を生徒に提示し、これを解説する授業を行った。３学期には、ゼミの総括として、生徒にレポートの課題を課した。この際、「新聞記事を活用すること」を必須とした。生徒のレポートとして、「イギリスのＥＵ離脱」や「香港デモ」についてのものがあった。

生徒の中には、同じ日の、新聞記事を数社分切り抜き、これらを比較しているレポートもあった。新聞社によって同じ記事でも伝え方が違うということを、生徒が実感することができた良い例

であった。一般の家庭では、新聞は１社からしかとっていない家庭が多いので、数社の新聞を学校に届けていただけるＮＩＥ指定校だからこそできた試みであったと思う。

３　考察

最近では家で新聞を取っていないという家庭も多く、生徒もインターネットを使って情報収集をすることが多い。しかし、インターネットを使っての情報収集は、自分が必要とする情報のみを、素早く獲得するには優れているが、その情報が偏ったもので、反対意見については目を通さないということも起こるかもしれない。その意味では電子媒体ではなく紙媒体の新聞に生徒が触れることは、非常に重要だったのではないかと思う。また、ふと目に入った記事から思いがけない情報を得ることも紙媒体ならではの効果と言えるのではないか。

本校のＮＩＥ実践においては、新聞が身近な場所にあり、簡単に手に取ることができるという環境を作っていただくことによって、生徒の、あらゆるメディアにアクセスし、批判的に分析評価し、創造的に自己表現をし、それによって市民社会に参加し、異文化を超えて対話し、行動する能力を育成する、いわゆるメディア・リテラシーの育成をはかることができたのではないか。

反省点としては、「市民社会に参加する」ことについてはまだ弱かったのではないかと思う。生徒が自ら社会のために何ができるかを考えるだけではなく、実際に社会にアクセスすることを促していくことも、今後考えていきたい。各学年の発表では、同じ学校の生徒や保護者の前で発表するだけでなく外部のコンクールなどにも積極的に参加する機会を設けていければより良かったのではないかと思う。

課題は質の高い新聞の作成

松戸市立松戸高等学校　　瀬和　真一郎

１　はじめに

松戸市立松戸高校は松戸市に位置する市立の高校である。全校生徒は1044名、学校教育目標は「逞しくジリツ自立・自律した18歳を育てる」である。昨年度９月から２年間ＮＩＥ実践指定校となり、学校教育目標の実現に向けて様々な取り組みを行っている。

２　実践状況

（１）授業での取り組み

・体育理論

保健体育科では１学期と２学期に全校生徒に体育理論で新聞を活用している。体育・スポーツに関する内容について自分の興味関心のあるテーマを見つけ、新聞形式でまとめて提出している。

・保健（はがき新聞、切抜き新聞作り）

各学期の期末試験前の２時間で試験範囲内のテーマを取り上げ、はがき新聞や切抜き新聞にまとめ発表している。この新聞作りは各学期の復習（振り返り）にもなっている。また、今年度は自己評価や相互評価も取り入れ、「主体的・対話的・深い学び」につながるように働きかけている。

・国語表現

国語表現（３学年）の授業ではディベートの授業で新聞を活用している。新聞記事を活用することでディベートに必要な知識を得るだけではなく、思考力や判断力も向上し、授業の質の向上に役立っている。

・社会

地理研究、国際関係、現代社会では新聞記事を日常の授業で活用している。また、新聞記事を活用した問題を定期考査に出題している。事前に生徒に考査１週間前からの７日間の新聞記事（総合、社会、国際、政治の分野に限定）を出題することを予告することで生徒が新聞を読む環境を作っている。

・家庭科

3年生の家庭総合の「子どもを生み育てるということ」という単元の中で、新聞記事を用いたワークシートを作成し、授業で活用した。生徒は合計特殊出生率や婚姻件数等に関して最新の情報に触れたり、教科書には掲載されていない内容に触れることができ、深い学びにつながることができた。

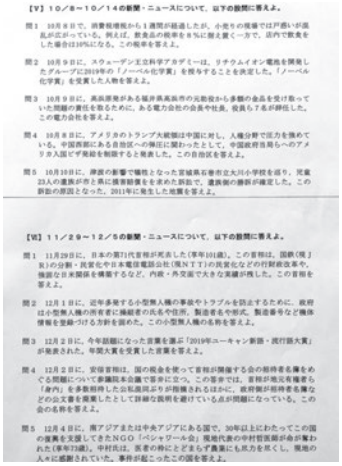
（２）部活動

男子サッカー部では部内に新聞委員会を作り、月に１回サッカー部新聞を発行し、廊下に掲示している。

（３）ＮＩＥコーナーの設置

毎日配達されている新聞を置くだけはなく、３学年の新聞スクラップや体育理論、保健で作成したはがき新聞、切抜き新聞、ＮＩＥ研修会で頂いた資料等が閲覧できるようになっている。生徒や教員だけではなく、学校行事等で来校される保護

者も興味を持って立ち寄っている。



（4）生徒の声

保健の授業アンケート（1年生）の結果を一部紹介する。

●授業で紹介する新聞記事について

・授業の最初の新聞を3分間で読む時間が内容理解につながってよいと思った。

・保健の学習プリントの裏に毎回新聞記事があることが良かったと思いました。理由は世間ではどのようなことが起こっているのかわかり、これからどのようなことについて学習を行うのかわかるからです。

・授業で行う内容に関連した新聞記事を裏に載せるのがとても良いと思いました。実際の事件や現状と結びつけることができ、理解しやすかったです。新聞の切り抜きは単元に関心を持てるからよい。知らなかったことを教科書以外で学ぶと記憶に残りやすいと思った。

●新聞作成について（はがき新聞、切抜き新聞作り）

・はがき新聞が自分で特に学びたいことなどに絞って書けたので良かった。

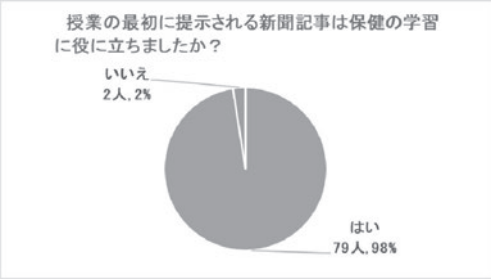
・新聞を作成する授業が多くて、自分なりにわかりやすくまとめることができてテスト前とか見返して自主学習できたので良かったと思いました。

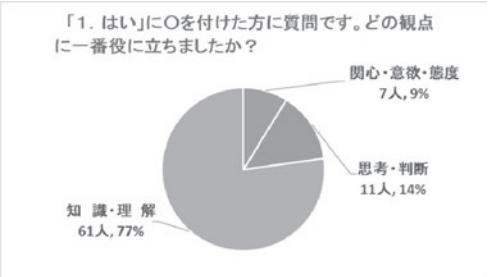
・新聞作成などで知識がついたので良かった。

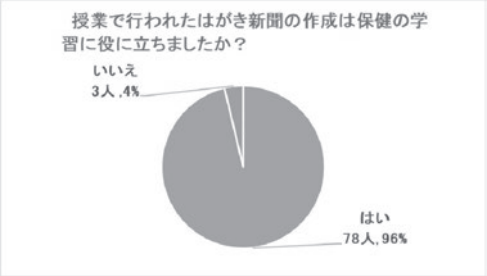
・新聞製作は自分が知った知識をしっかり書き表せる機会となりとてもいいと思いました。

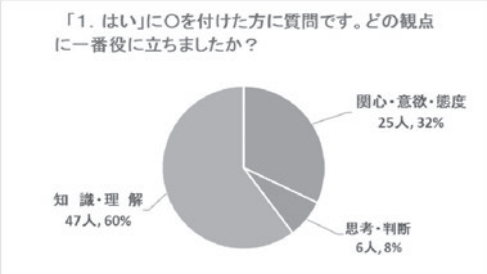
・新聞を書くことで復習できるのが良かった。

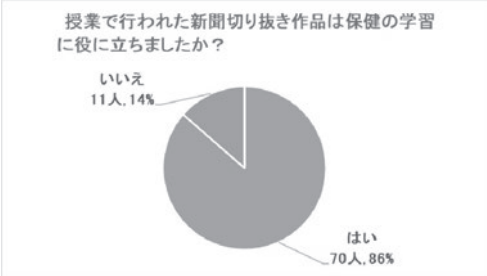
・はがき新聞で小さい紙にいろいろな知識が書けたこと。はがき新聞はその単元の需要なことが一つにまとまっていて後からでもわかりやすい。

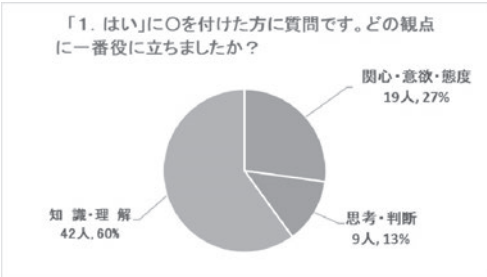












授業アンケートの結果から分かることは生徒のほとんどがＮＩＥに前向きに取り組んでいること、またＮＩＥの活動が観点別評価の中の「知識・理解」を深めるのに役に立っているということである。

特に後者の結果に関しては改善が必要だと感じた。なぜなら、確かに日々の学習において知識を新たに身につけることは重要である。しかし、ベンジャミン・ブルームの思考の６段階では「知識」、「理解」、「応用」、「分析」、「統合」、「評価」という６つの段階が考えられており、情報を思い出す「知識」がもっとも単純なものとされ、物事の判断を下す「評価」や情報を「統合」して何かを作り出す部分が最も複雑なものとされている[1)]。新聞に触れることで知識」、「理解」だけではなく、「応用」、「分析」、「統合」といった力も向上できるはずなのだが、現状ではまだまだ生徒に新聞の教育効果を落とし込めていないという結果だということになる。

新学習指導要領においては学校と社会との連携・協働を求める「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、変化の激しいこれからの社会を生きる子供たちに必要な資質・能力を身につけさせることが求められている[2)]。新聞の多面的な教育効果を生かすために日々の授業改善がまだまだ必要であることを感じた。

３　まとめ

新聞を活用した様々な教育活動を通して生徒に少しずつ新聞の重要さや面白さを伝えられたかなと感じている。今までの活動を通してＮＩＥの長所は気軽に簡単に準備ができながらも、教育効果が非常に高いことであると改めて感じている。

今後の課題は、より質の高い新聞を作成するためにルーブリック等を用いた自己評価、相互評価

を活用する、既にＮＩＥ活動をしている教員と連携する、まだＮＩＥ活動を行ったことがない教員を少しずつ巻き込むことである。継続は力である。これからも生徒に新聞に触れる機会を増やしていきたい。

＜　参考資料　＞

1）スター・サックシュタイン，成績をハックする 評価を学びにいかす10の方法，新評論,2018.

2）中央教育審議会教育課程部会，“児童生徒の学習評価の在り方について（報告），”2019.

新聞を身近に感じよう

千葉県立君津青葉高等学校　　根本　哲一

１　はじめに

本校は平成28年４月に創立100周年を迎えた県下有数の伝統校であり、これまで、農業･林業･工業などの実業の学びを中心に多くの人材を県内外に送り出してきた。

近年、地域の急激な少子化により生徒数が減少しているものの、食品、農業、環境、土木、商業、家庭・福祉、普通の７系列の総合学科高校として存在意義を高めている。

さて、本校は、昨年度ＮＩＥ実践推進校の指定を受け、「新聞を身近に感じよう」をテーマに掲げて実践に取り組んできた。本年度も同じテーマで実践に取り組んだ。

今一度、テーマ「新聞を身近に感じよう」の設定理由について簡単に説明しておきたい。

まず、家庭で新聞を購読している割合が低い。１学年生徒にアンケート調査をしたところ、購読率はほぼ４割であった。生徒の半数以上が、生まれてからこのかた自宅で新聞を見たこと、めくったことが無いのではないか。にもかかわらず､小･中･高校の先生の話に必ず登場する枕ことばが｢テレビや新聞で…｣というフレーズである。考えてみればずいぶんと実態からかけ離れている。

これを「なるほど、確かに新聞に載っている」と生徒に実感させたいと考えた。

続いて、本校の場合、読解力に課題がある生徒多く、教科書の内容を十分に理解させることが難しい。ならば、ファッションやスポーツ、生徒の興味関心が高い記事、大きな事件や事故、世の話題になっていることに関係した記事などから、リーディングスキルを高めていきたいと考えた。

２　実践内容と成果

（１）ＮＩＥコーナーの設置

昨年度から設置したＮＩＥコーナーの充実を図った。テーマごとに複数紙のスクラップの掲示に加えて、授業や進路との関係が理解できるよう工夫した。

このことにより、生徒や先生方に少しずつＮＩＥの取組みが認識されていった。じっくりと目を通す生徒は決して多くはないが、授業で話をすると「先生､その話､掲示板の新聞に載っていたね」などという会話が飛び出すようになった。

また､学級担任の中から､朝や帰りのＳＨＲで、ＮＩＥコーナーの内容を取り上げてくれる先生も出はじめた。意図していたことではあるが､「新聞を身近に感じよう」というテーマは生徒だけでなく、先生方に向けたメッセージとしても機能した。

（２）新聞社の見学

昨年度に引き続き、新聞の作成には多くの人が関わり、新聞が家庭に届くまでにどのような苦労があるのかを理解させること。これを二つ目の実践の柱とした。

11月、３年生の学校設定科目を選択している生徒を中心に新聞社の見学に出かけた。家庭の経済力や教育力から考えて本校生徒の場合、アクアライン高速バス、ＪＲ、地下鉄を乗り継ぎ出かけたこと自体にも意味がある。

新聞社では広いフロアにたくさんの時計が掛けられている編集局、インクの臭いが充満していた印刷工場等を見学した。約90分の案内すべてが丁寧で分かりやすく、この見学を通じて生徒は新聞に対する興味や関心を高めることができた。

また、本校を卒業し当該新聞社の印刷部門で仕事をしている卒業生も見学に際しての案内役を務めてくれた。房総半島中央部にある本校の生徒、東京都内の新聞社に勤めている卒業生（ＯＢ）にたいそう感激していた。新聞社の粋な計らいに心から感謝したい。

（３）テーマ学習で新聞記事を利用する

３年生の選択政治経済や社会探究の授業で新聞を活用した。それは、昨日、今日の新聞だけではなく、生徒が生まれる前の新聞も含めてである。

特に、ハンセン病や日韓関係を時系列的に捉える授業では、問題や事件が起こった際に、また裁判の判決が出された際に、新聞はこれらの問題をどう伝えてきたかという視点でレポートを作成しグループワークをした。

（４）職員へ新聞記事の配付

すでに紹介したように本校の場合、生徒家庭の新聞購読率は極めて低い。しかしながら、実は先生方の自宅での購読率（デジタル版を含めて）も決して高くはない。

本校生徒は９割以上が就職希望である。つまり、生徒の多くは本校を卒業すると実社会に出るわけである。３年生の秋には一般常識などの就職試験を受ける。

この状況を踏まえて、指導する先生方を見ると、専門分野には通じていても、経済社会の動きや社会生活上の一般常識が決して十分とは言えない先生も少なくない。

ＮＩＥ事業により学校に届く新聞紙から、必要な記事を印刷し先生方の机上に配る。それは、「五節句」や「二十四節気」、歴史上の周年記念日などにも及んだ。

３　まとめ

この２年間は「新聞を知る」、そして「新聞を読むといろいろなことが分かって面白いな」と感じるようになって欲しいと考えて取組んできた。

本校の実践が目指すところは、これから社会の一員として生きていく上で、生徒に新聞（デジタル版も含めて）を上手に利用できるようになってもらいたい、長くつきあって行けるようになってもらいたいということである。そのため、他校とは少し違う実践となっている。

指定期間が終わろうとしている今、生徒にはＮＩＥ活動が少しずつ周知されてきたように感じている。

しかしながら、私の力不足と段取りの悪さから、先生方への働きかけが不十分であり、特に他教科の学習活動や進路指導を巻き込む実践には至らなかった。このことが、生徒が主体的に新聞を

開き、世の中のことを知ろうとする動機付けの失敗に繋がっているのではないか、と考えている。

ＮＩＥ実践指定の終わりがＮＩＥの終わりではない。「職員向けのＮＩＥ研修会」の実施など、これまでの反省を踏まえ、今後も継続して取り組んでいきたい。

「新聞とは？～新聞への興味・関心を高める～」

千葉県立小見川高等学校　　佐々木　祐弥
協力者　平川　雄大

1　はじめに

まず初めに本校についての説明をする。本校は千葉県香取市の小見川城山公園頂上付近に位置する。城山公園という名の通り、鎌倉時代から戦国時代末期にかけて、豪族粟飯原氏の城が築かれていた場所であり、今でも城跡の一部が残存している。そのため、一年を通して本校周辺には人が訪れ、地域との繋がりが深い学校である。2022年には創立100年目を迎え、本校では様々な取り組みが行われている。とりわけ「福祉のこころ」を育む高校といった目標は、この創立100年目を迎えるにあたっての大きな目標となっており、人の幸せを願うことのできる生徒を育てるべく、学校運営を行っている。

本校は2019年度ＮＩＥ実践校となったが、この実践を行うきっかけも「福祉のこころ」を育む高校という目標にあった。思いやりをもてる人間になるには、様々な考えを受け入れられる必要がある。そのためには自分の好む情報だけでなく、多種多様の情報に触れる機会を増やさねばならない。その点で、多種多様な情報を提供する新聞を読むことは非常に重要なことであり「福祉のこころ」を育むことにおいて有効であると考えたのである。

特に意識をしたのは、生徒が新聞に興味・関心を持つことであった。いかに新聞を読んでみようと思うか､その点を常に考えて実践を行っている。

2　実践状況

（1）１年「現代社会」の実践例

本校では、特に地歴公民科の授業の中で、ＮＩＥ教育の実践を行っている。まずは１年「現代社会」の授業での実践例を紹介していく。

１年生の現代社会の中で取り入れているのは「一面紹介」といった取り組みである。これは教師が新聞の一面を生徒に紹介をするという取り組みである。シンプルではあるが、一面であれば生徒も読んでみようという気になる。ただ紹介するだけではない。何かの記念日や、日によってはその日の出来事に関係する内容が記事となっていることがある。その際には、教師側が「今日は何の日？」と生徒に聞き、生徒は何の日か考え、実際を新聞の記事から見つけ出すといった取り組みも行っている。この実践は日々の中で非常に取り組みやすく、生徒も教師も簡単に新聞というものに触れられることが特徴である。

（2）２年「日本史Ａ」の実践例

日本史Ａの授業では「なぜ日本で新聞が読まれるようになったのか。」というテーマで、日本における新聞文化の誕生までの歴史を学ぶ授業を展開した。この実践では明治時代に新聞が誕生する前に，江戸時代にて庶民のメディアとして新聞の代わりの役割を果たしていた「瓦版」に注目を

させた。瓦版とは粘土を瓦形に焼いたものであり、その上に人の目を惹くような面白い記事が掲載されていたとされる。この瓦版は「読売」と呼ばれる顔を隠して読みながら売る者たちによって庶民に親しまれていた。

しかし、この瓦版は人の目を惹くために嘘の情報を掲載しており、1684年に当時の江戸幕府から読売禁止令が出されていた。いわゆる非合法出版物だったのである。このような瓦版に対して明治時代に誕生した新聞を比べ、広く流通し、今でも人々に読まれるようになっているのはなぜかといった点を生徒に考えてもらった。

この実践はメディア史を学ぶことを目的としているが、裏の目的では正しい情報を伝えてくれる新聞の大切さに生徒が気付くことを意図していた。歴史の中から新聞について知ることができる重要な実践であったと言える。

３　結果

まず（１）の実践であるが、この実践では生徒の新聞に対する「興味・関心」を高めることができた。「新聞は難しい」といった先入観を持っている生徒が多く存在したが、この実践により改善の一途が見受けられている。

（２）の実践では、正しい情報を誰もが理解できる新聞という存在の大切さに生徒が気付くことができた。今でこそインターネットメディアでのニュースに目を通す機会が増えているが、過去から現在まで正確な情報を届け続けている新聞の重要性に気付くことができた。新聞には独自の歴史と良さがあることに気付くことができている。

４　考察

このように、結果も踏まえると、これらの実践を通して新聞に対し一定の興味・関心を持つことはできてきたと考察できる。一方で、新聞を利用し、活用するといった行動にはまだ結びつけられていない。自分自身で新聞を読んで、何を感じ、感じたことを表明できるか、どのような社会の問題点に気づけるかといった点には未だたどり着けていないと感じる。これは、生徒が新聞を活用するといったことを重視する実践を行っていないことに起因すると考えられる。この点は次年度の実践に向けた課題であると考察した。

５　まとめ

ここまでの報告を振り返り、本校で新たに行っていくべきことは、生徒が新聞を能動的に活用することにあると感じた。しかし、2019年度の取り組みとしては、まず新聞に興味・関心を持つことを重視できたので有意義であったと感じる。これは、何事にも能動的になるには最初に興味・関心を高める必要があるからである。今回の実践を、次の実践につなげられるよう、本校は取り組みを続けていく。

ＮＩＥ実践報告

千葉県立大網高等学校　　林　雅彦

１　はじめに

本校では、2019年度よりＮＩＥ実践指定校となった。本校は、2008年に千葉県立山武農業高校と千葉県立大網高校が統合してできた学校で、統合して10年が経過した。現在は、農業系学科３クラス、普通科２クラスの５クラスの学校である。次年度より普通科が１クラス減となり、農業系学科３クラス、普通科１クラスの４クラス体制となる。地域の農業従事者の育成の他、京葉工業地域の食品工場の従事者、地域の工場の従事者を多く生み出してきた他、専門学校や大学にも多くの生徒が進学している。進路別割合としては、就職が50%、進学(大部分は専門学校）が50%である。ＮＩＥの実践は学校事情を含めながら、どのように実践したのか以下報告していきたい。

２　実践状況

今年度は、主に地歴・公民科の「政治・経済」の授業でＮＩＥを実践した。具体的には、８紙ある新聞の中から、自分の好きな新聞記事を選び、その記事の概要となぜ、その記事を選択した理由、記事についての考察を含めたレポートを作成することを行った。最初は、戸惑っていた生徒たちもいざ選択して、レポート作成となると真剣な眼差しで取り組んでいた。完成したレポートは、ラミネートして廊下に掲示した。最後に、そのレポートを見合って、自分が作成したレポート以外でよいものに投票することを行った。授業でのＮＩＥ実践は以上となるが、それ以外としては、ＮＩＥによる８つの新聞は、普段は進路閲覧室に置いた。

理由としては、本校は就職希望者が多いことから、面接の時事対策として、新聞を活用することにした。

就職希望の生徒は、新聞を読みながら、面接対策を行っていった。

３　結果

レポートの作成を通して、多くの生徒が社会に対する見方や考え方を広げることができたと回答した。自身が記事を選択し、その記事を通して、見方や考え方を広げるだけにとどまらず、他者のレポートを見ることで、多面的・多角的に視野を広げることができた。

また、進路閲覧室に新聞記事を置いておいたことから、就職対策として活用した。今年度の進路決定状況は９割近くとなり、就職対策としてもＮＩＥを活用することができた。

４　考察

ＮＩＥの活動を通して、生徒のものの見方や考え方を広げることができたことは結果でも述べた

とおりである。地歴公民科の学習指導要領の目標である社会的視野の拡大について、ＮＩＥが大きく貢献することができたのはいうまでもない。次年度も引き続き、ＮＩＥの活動を通して、生徒のものの見方や考え方を広げることに貢献していきたい。また、新聞を通して社会への興味・関心が高まったと回答した生徒も多かったので、社会人となっても新聞を読む習慣づけにつながっていくのではないかと思われる。

５　まとめ

今年度のＮＩＥを通して、まず生徒のものの見方や考え方を広げることができたことが一番の収穫である。

社会的視野の狭さは、排他的な考え方の根源となり、民主主義を揺るがす要因ともなる。幅広い視点でものごとを考えることこそ、民主主義社会の形成者になることに他ならない。そのような部分を育てることができたことを今後も継続していきたい。また、新聞を通して、社会への興味・関心を高めることもできた。社会への興味・関心が低い若者が増加する中で、生徒が社会へ興味を持たせることができた。今後は、社会人となっても、社会への興味・関心を持ち、新聞の読者となることで、見方や考え方の広い大人となってくれることを心より願っている。

病弱特別支援学校における新聞を活用した授業作り

千葉県立仁戸名特別支援学校　　高橋　智子

1　はじめに

ＮＩＥ実践指定校２年目となった本校は、病弱に特化した特別支援学校である。児童生徒は病気を治療しながら学校生活を送っている。隣接の病院に入院しながら登校している児童生徒も多い。少人数学級であり、教師と児童生徒が意見を交わしやすい雰囲気がある。課題としては次のようなことが挙げられる。①活動時間に制限がある。②転出入が多く、児童生徒が入れ替わる。③同世代やいろいろな人の考えを知る機会が少ない。

昨年度は、新聞を身近に感じること、社会の動きを知ること等をねらいとして、実践に取り組んだ。今年度も同様に、新聞を身近に感じること等をねらいとした。また、課題を踏まえながら児童生徒の実態に応じた新聞を活用した授業実践を行なった。

2　実践状況

（1）「新聞コーナー」の設置

昨年度に続き「新聞コーナー」を廊下に設置し、児童生徒、職員が自由に新聞を読むことができるようにした。昨年度の反省から、新聞のある学校になれた頃に購読期間が終わってしまったので、新聞の種類を減らし、長期間購読できるように工夫した。また、「気になるニュース」として、ＮＩＥ担当が話題となっているニュースの記事を掲示して、活用を促すようにした。

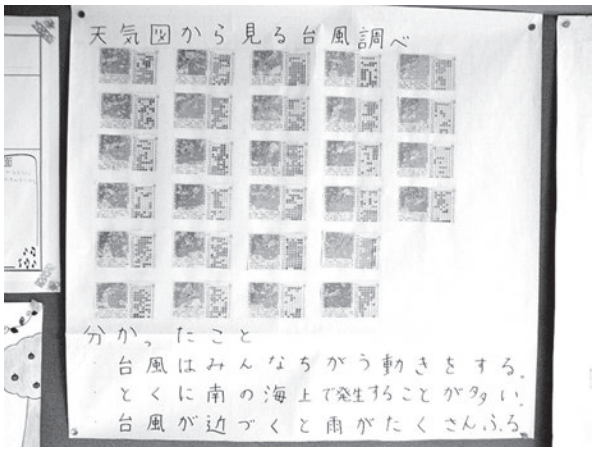
職員を中心に新聞を手にする姿が多く見られ、資料や教材にするために新聞を自由に持って行く様子も見られた。新聞のある学校という雰囲気に職員もなじんでいた。

（2）授業での活用について

①小学部

理科「天気と情報」

５年の理科の授業では、新聞の天気図を活用した。天気図を約１か月集め、気象状況を観察した。天気図から天気がどのように変化しているか、台風がどのように動いているか調べた。実際に台風の被害が多く出ていたこともあり、関心をもって取り組む様子が見られた。また、天気図を見比べることで、天気図と日々の天候の変化との関連を理解することにつながった。



社会科「わたしたちの生活と食料生産」

５年の社会の授業では、新聞と一緒に配られる「ちらし」を活用して食料の産地調べを行なった。「ちらし」から野菜・肉・果物等を切り取り、模造紙に描いた日本地図上に貼りつけた。児童は作業しながら外国産がたくさんあることに気付き、自分たちの生活とのつながりを意識できた。

また、前単元で学習した「あたたかい土地（沖縄）や寒い土地（北海道）のくらし」にも関連

して考えることができた。

道徳「あえて議論しよう」

６年の道徳の授業では、小学生新聞に掲載された「ＬＧＢＴについて」を取り上げた。始めは児童から嫌悪感に近い感想が出されたが、教師から現実にそのような生徒がいることを知らされて、とても驚いていた。記事から社会規範と現実のずれに苦しんでいる人の存在について考え、本当のことを言ったらいじめられる、苦しんでいる、みんな違う、等児童の考えが広がっていった。

認め合うことの意味を考えることのできた授業になった。

②高等部

「国語」課題作文

①中高生新聞に毎週掲載されている「課題作文のコーナー」を活用した。時事的な内容のコラムを読み、200字の課題作文に挑戦したり応募したりするコーナーである。

生徒が書いた作文と翌々週に掲載された応募者の作文とを、読み比べた。

同じテーマの作文を読むことで、意見の交換にもつながり、同世代の考えを知る機会にもなった。生徒は自分と同じ意見が見られたときには、素直にうれしそうであった。

同じ意見でも表現方法を比較することで、自分の作文を推敲することができた。また、自分と違う意見でも説得力のある文章に感心する様子が見られた。課題に取り組む中で、書きやすい課題と苦手な課題があることに気付き、なぜ苦手なのか考えることで自分の興味や関心の方向性を知ることにもつながった。

②新聞の「見出し」から、「記事を読みたくなる見出し」「おもしろい見出し」を選び、その理由について話し合った。

普段活字を読まない生徒を対象に行なった。見出しから新聞に興味関心をもつことをねらいとした。新聞をめくりながら見出しを読み、選ぶ様子や、自分の興味関心で選んだと理由を挙げる様子が見られた。

３　まとめ

小学部から高等部まで新聞は教材や資料としていろいろな活用の仕方があることを、指導する側

として学ぶことができた。また、ネットで検索して情報を探すことに慣れている子どもたちにとって、新聞のさまざまな情報や多様な考えの中から自分で選び、読み、考える経験は、ものの見方や自分の考えを深める経験につながったと考える。

新聞を身近に授業に活用できた２年間に感謝したい。

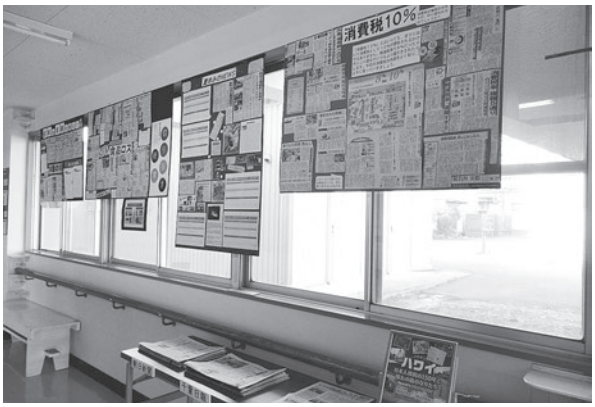
生徒が主体的に取り組み、自ら考えることをめざした指導

千葉県立四街道特別支援学校　　石川　美雪

1　はじめに

本校は、病気を治療しながら学ぶ特別支援学校である。ＮＩＥ実践推進校の指定を受けて２年目の取り組みを行った。今年度も、高等部での地歴公民科及び社会科の教科・科目を中心に、「生徒が主体的に取り組み、自ら考えることをめざした指導」をテーマに取り組んだ。

小学部など他の学部にも利用しやすいＮＩＥコーナーの充実をめざした取り組みも行った。



2　実践状況

高等部３年生の生徒は、公民科の選択科目として政治・経済を履修している。昨年度は新聞への興味関心は低かったが、政治・経済を学習するようになり、政治や経済に関する内容に興味関心を示すようになり､新聞も読むようになっていった。

また、２、３年の生徒６名は、社会科として、地理的分野、歴史的分野、公民的分野を学習している。ネットニュースやテレビでのニュース番組を良く観ているが、自宅で新聞を購読していないため、ほとんど読んだ経験がない。

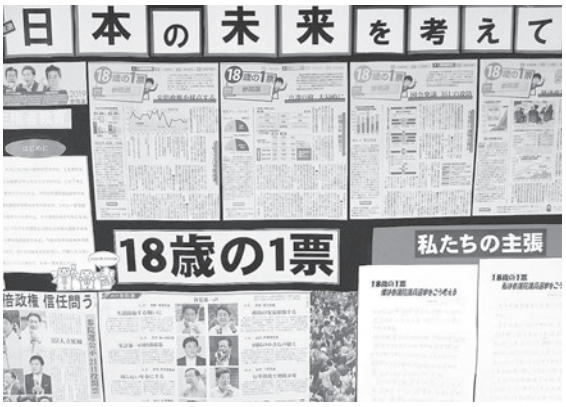
そこで､今年度は政治･経済や社会科の時間に、新聞を活用し、より深く社会的事象を知り、生徒自身が主体的に取り組み、自ら考えることをめざした指導のあり方を実践することにした。

（１）政治・経済での取り組み

政治・経済の授業は、週２時間、毎週火曜日と金曜日に行っている。学習内容とその時々の時事問題を関連させながら、授業を行った。

①18歳選挙権と参議院議員選挙

選挙制度を学習している時期と参議院議員選挙の時期が重なり、新聞を活用しながら、選挙制度と憲法改正について学んだ。憲法改正に伴う国民投票は、有権者となる高校３年生の生徒にとっては現実的で、自分のこととして捉えやすい内容である。新聞各社が参議院議員選挙に関する特集記事を新聞に掲載した。生徒にとっては、選挙戦の概要が把握でき、自分の考えも整理しやすかったようであった。「日本の未来を考えて」というテーマで、それぞれが参議院議員選挙をこう考えるという内容のレポートを書いた。



レポートの最後に「今回の参議院議員選挙は憲法改正を決める大きな選挙の１つになると思われます。投票に行かれる方々には日本の未来を考えて投票してもらいたいです。」とまとめ

た。教師が授業後に使用した記事とレポートを使い切り抜き新聞に仕立て、廊下に掲示した。１、２年生の生徒もこの掲示物を見たり、読んだりしていた。

②核廃絶～私達から～

日本の平和主義と国際平和について学習した。その後に、広島や長崎の原爆投下を基に、核廃絶に関する切り抜き新聞を作成した。

広島や長崎の平和式典に関する記事を読み、原爆投下時の様子や被爆者、若者の考えを知ることになった。記事を読んでいるうちに「未来につなげる」をキーワードに、コメントやまとめの文を考え、そのキーワードに添って、記事の中の大事な箇所に線を引き、コメントやまとめの文を記述した。平和式典の記事では、広島の小学生の「平和への誓い」に感銘を受け､「被爆者も高齢化が進み、この悲惨な体験を未来に語り継ぎ、核廃絶に繋がっていくことを祈りたい」と発信した。新聞は現代社会を映しだすだけでなく、74年経った今でも原爆投下を追体験できる手段でもある。教師が経験を話すよりもインパクトが強く、核廃絶に向けて考える良い機会になったと思う｡今後も新聞を通し､様々な社会的事象と出会い、自分の考え方の幅を広げていって欲しい。

（２）社会科での取り組み

①新聞タイムの設定

前期は、社会科の授業の後半10分に「新聞タイム」を設定し、新聞に親しむ時間を作るようにした。自分で各新聞社の新聞を選択し、一面からめくり、興味のある新聞記事を探すようにした。最初は自分の趣味に関する記事を選ぶことが多かったが、回数を重ねるうちに自分の生活に直結するような政治や経済などの記事を選ぶようになり、視野の広がりを感じた。

②プラゴミに関する新聞記事の作成

「新聞タイム」の中で、ある生徒がプラスチックゴミ（以下プラゴミ）に関する記事を選んだことから、全員でプラゴミに関する切り抜き新聞を作ることにした。プラゴミについては、理科でも学習していたので、興味関心をもって取り組むことができた。

４月から９月までの全ての記事を全員で分担して読み、切り抜き新聞に使用する記事を選んだ。時間はかかったが、プラゴミに関する内容を広く深く知る機会になった。選んだ記事を、「環境汚染に関すること」や「世界的枠組みＧ20に関すること」､「プラゴミの削減で私たちにできること」に分類したことで、プラゴミに関する現状や問題点、今後に向けて私たちができることを明確に整理することができた。その後、全体テーマや役割分担の話し合いの場をもった。全員が意見を出し合いながら、テーマを絞りこみ、決定することができた。役割分担に

関する話し合いでは、①新聞記事にコメントを書く、②切り抜き新聞のまとめを書く、③タイトルを書く、④記事を読み、重要な箇所に線を引くなどの４つの活動に分かれ、それぞれの活動に取り組んだ。分らない時は、再度新聞記事を読むように促し、自分たちで考えてまとめていくようにした。どの係の生徒も何度も記事を読み、コメントを書いたり、線を引いたり、まとめの文を書いたりすることができた。ある生徒は「コメントを書くのはなかなか大変だったけれど、仕上げられて良かった」と感想を書いた。

生徒が興味関心のある題材を選んだことで、自分たちで話し合い、協力して取り組むことに繋がったと思われた。今後も、新聞を読むことで、視野を広げていって欲しい。

（３）日本史や世界史での取り組み

10月に転校生が転入し、日本史や世界史でも新聞を活用した。授業の冒頭部分で、「今週の出来事」として紹介した。病状が安定し前籍校への転入が決まった時に、「切り抜き新聞を作ってみないか」と促すと、「やってみたい」と話す。生徒が選んだ記事はフランシスコ教皇の来日に関する記事であった。フランシスコ教皇が日本に及ぼす影響を様々な視点で選んでいた。テーマを決め、一番大事な記事を用紙の中央に据えたレイアウトを考え、メッセージ性の高い内容のまとめを記述し、切り抜き新聞を完成させることができた。

また、教師もフランシスコ教皇来日に関する切り抜き新聞を作成し、生徒が作成した切り抜き新聞と比較検討をした。同じ事象であっても、見方、考え方によって全く違う切り抜き新聞になることに改めて気づくことができた。今回のように、それぞれの科目を横断的に学びながら、公平な立場での歴史認識をしっかりともてるようになって欲しい。

（４）ＮＩＥコーナーの充実

誰でも新聞を読めるように各新聞社の新聞を置くと共に、裁判員裁判10年や台風15号、消費税10％、ラグビーワールドカップ、ノーベル賞、フランシスコ教皇来日などの記事を切り抜き新聞にして掲示し、新聞を通して社会的事象に関心をもてるようにした。

特に千葉県を直撃した台風に関する切り抜き新聞は、「台風被害の現状」「台風被害による助け合い」「復興への足掛かり」の３部作を作成し、掲示した。

高等部の生徒も良く読んでいたが、小学部の児童も何度も見にきて、被害の凄まじさを教師と会話をしながら読んでいた。切り抜き新聞にして、情報を整理して伝えたことで、児童生徒にも分かりやすかったと思われた。

３　まとめ

昨年度新聞を活用した授業を行なっていた生

徒が卒業し、新たな生徒とＮＩＥ活動に取り組んだ。新聞を読んだり、新聞記事を選び感想を発表したり、感想をまとめたりすることから始め、選んだ新聞記事を再構成した切り抜き新聞としてまとめることができるようになった。そこには記事に関する興味関心がもてるようになったことや、自分たちで主体的に学び、考える力が育ってきたからだと思われた。

ＮＩＥコーナーに新聞を置くだけではなく、新聞の面白さや奥深さを様々な視点で生徒に伝えていくことも大切なことである。

2019（令和元）年度ＮＩＥ実践校一覧

	学校名	校長名	実践代表者名	所在地	ＴＥＬ／ＦＡＸ	備考	
1	千葉県立成田国際高等学校	深山　和利	石毛　一郎	〒286-0036 成田市加良部３－16	0476-27-2610 0476-26-7154	2017・18 19年度	継続
2	睦沢町立睦沢小学校	阿部倉光宏	鳥居　由貴	〒299-4415 長生郡睦沢町小滝450－１	0475-44-0009 0475-44-2830	2018 2019年度	
3	市原市立清水谷小学校	小野寺源彦	阿部　広樹	〒290-0142 市原市ちはら台南５－２	0436-52-3681 0436-52-3691	2018 2019年度	
4	鎌ヶ谷市立鎌ケ谷中学校	菅井　浩樹	大塚　功祐	〒273-0101 鎌ヶ谷市富岡１－２－１	047-444-0456 047-444-0457	2018 2019年度	
5	昭和学院秀英中学校高等学校	鈴木　政男	出口　郁子	〒261-0014 千葉市美浜区若葉１－２	043-272-2481 043-272-4732	2018 2019年度	
6	松戸市立松戸高等学校	浅田　　勉	瀬和真一郎	〒270-2221 松戸市紙敷２－７－５	047-385-3201 047-385-3467	2018 2019年度	
7	千葉県立君津青葉高等学校	安西　聖依	根本　哲一	〒292-0454 君津市青柳48	0439-27-2351 0439-27-2146	2018 2019年度	
8	千葉県立仁戸名特別支援学校	渡辺あけみ	高橋　智子	〒260-0801 千葉市中央区仁戸名町673	043-264-5400 043-268-5082	2018 2019年度	
9	千葉県立四街道特別支援学校	平野　洋一	石川　美雪	〒284-0003 四街道市鹿渡934－45	043-422-2609 043-424-4679	2018 2019年度	
10	習志野市立東習志野小学校	鈴木　清彦	大類　紀章	〒275-0001 習志野市東習志野３－４－２	047-477-8484 047-477-8485	2019 2020年度	新規
11	香取市立小見川中学校	林　　俊幹	松井　初美	〒289-0314 香取市小見川4685	0478-82-3144 0478-82-3145	2019 2020年度	
12	いすみ市立浪花小学校	行川　　永	幸保美知栄	〒298-0012 いすみ市小沢1157	0470-62-1507 0470-62-4333	2019 2020年度	
13	市川市立新井小学校	小嶋　享治	安井　真紀	〒272-0144 市川市新井１－18－13	047-357-1722 047-357-1727	2019 2020年度	
14	千葉市立検見川小学校	淺野　一久	仲西　淳人	〒262-0023 千葉市花見川区検見川３－322－23	043-273-8030 043-273-1269	2019 2020年度	
15	館山市立館野小学校	金房　　努	田中福太郎	〒294-0014 館山市山本1028	0470-22-1061 0470-24-2173	2019 2020年度	
16	柏市立手賀中学校	大越　章正	伊藤　昌子	〒270-1454 柏市柳戸690	04-7191-1604 04-7191-1218	2019 2020年度	
17	千葉県立小見川高等学校	田中　三郎	佐々木祐弥	〒289-0313 香取市小見川4735－１	0478-82-2146 0478-83-2494	2019 2020年度	
18	千葉県立大網高等学校	岩土　賢祐	林　　雅彦	〒299-3251 大網白里市大網435－１	0475-72-0003 0475-73-2095	2019 2020年度	
19	船橋市立前原小学校	齊藤　浩憲	野崎　敏之	〒274-0825 船橋市前原西２－28－１	047-472-2156 047-472-2157	2019 2020年度	

2019（令和元）年度　千葉県ＮＩＥ推進協議会　役員

会　長	藤川大祐	千葉大学教育学部教授
副会長	中澤泰藏	千葉県小学校長会会長
副会長	市東　努	千葉県中学校長会会長
副会長	佐藤　宰	千葉県高等学校長協会会長
顧　問	澤川和宏	千葉県教育委員会教育長
顧　問	磯野和美	千葉市教育委員会教育長
幹　事	原　早苗	千葉県小学校長会副会長
幹　事	椎名和浩	千葉県中学校長会副会長
幹　事	安藤久彦	千葉県高等学校長協会副会長
幹　事	西山　博	千葉県特別支援学校長会副会長
幹　事	鶴岡利明	千葉県教育庁学習指導課教育課程室主幹
幹　事	渡邊涼二	千葉県教育庁学習指導課指導主事
委　員	村上宣雄	朝日新聞社　千葉総局長
委　員	斎藤　浩	産経新聞社　千葉総局長
委　員	鬼木洋一	東京新聞社　千葉支局長
委　員	池内新太郎	日本経済新聞社　千葉支局長
委　員	松之舎茂喜	日刊工業新聞社　千葉支局長
委　員	鮎川耕史	毎日新聞社　千葉支局長
委　員	吉山隆晴	読売新聞社　千葉支局長
委　員	佐々木昌巳	時事通信社　千葉支局長
委　員	高橋　潤	共同通信社　千葉支局長
委　員	佐藤大介	千葉日報社　編集局長
監　査	（原則、各新聞社による九社会幹事）	
アドバイザー	石毛一郎	県立成田国際高等学校教諭
アドバイザー	内山浩史	県立佐倉高等学校教諭
アドバイザー	松井初美	香取市立小見川中学校教諭
アドバイザー	武藤和彦	市川市立市川第三中学校初任者指導
アドバイザー	神尾啓子	千葉県新聞教育研究所主宰
アドバイザー	石川剛士	浦安市立日の出小学校教諭
アドバイザー	芳賀裕美	市川市立須和田の丘支援学校教諭
事務局長	安原直樹	千葉日報社読者サービス室長

2020（令和２）年度ＮＩＥ実践校一覧

	学校名	校長名	実践代表者名	所在地	ＴＥＬ／ＦＡＸ	備考	
1	市原市立清水谷小学校	楠　浩	阿部　広樹	〒290-0142 市原市ちはら台南５－２	0436-52-3681 0436-52-3691	2018・19 20年度	継続
2	千葉県立四街道特別支援学校	平野　洋一	石川　美雪	〒264-0003 四街道市鹿渡934－45	043-422-2609 043-424-4679	2018・19 20年度	
3	習志野市立東習志野小学校	鈴木　清彦	坂井　祐介	〒275-0001 習志野市東習志野３－４－２	047-477-8484 047-477-8485	2019・ 2020年度	
4	香取市立小見川中学校	林　俊幹	山崎久美子	〒289-0313 香取市小見川4685	0478-82-3144 0478-82-3145	2019・ 2020年度	
5	いすみ市立浪花小学校	高松　浩	土橋　結城	〒298-0012 いすみ市小沢1157	0470-62-1507 0470-62-4333	2019・ 2020年度	
6	市川市立新井小学校	海老原澄子	安井　真紀	〒272-0144 市川市新井１－18－13	047-357-1722 047-357-1727	2019・ 2020年度	
7	千葉市立検見川小学校	淺野　一久	仲西　亮人	〒262-0023 千葉市花見川区検見川町３－322－23	043-273-8030 043-273-1269	2019・ 2020年度	
8	館山市立館野小学校	石崎　克也	栗山　徹	〒294-0014 館山市山本1028	0470-22-1061 0470-24-2173	2019・ 2020年度	
9	柏市立手賀中学校	中村　匡志	関根　亜弥	〒270-1454 柏市柳戸690	04-7191-1604 04-7191-1218	2019・ 2020年度	
10	千葉県立小見川高等学校	岩井　宏一	佐々木祐弥	〒289-0313 香取市小見川4735－１	0478-82-2146 0478-83-2494	2019・ 2020年度	
11	千葉県立大網高等学校	岩土　賢祐	林　雅彦	〒299-3521 大網白里市大網435－１	0475-72-0003 0475-73-2095	2019・ 2020年度	
12	船橋市立前原小学校	齊藤　浩憲	野崎　敏之	〒274-0804 船橋市前原西２－28－１	047-472-2156 047-472-2157	2019・ 2020年度	
13	船橋市立法典西小学校	峯川　治久	堀澤　清	〒273-0046 船橋市上山町１－111－５	047-337-7982 047-337-7983	2020・ 2021年度	新規
14	千葉県立行徳高校　定時制	池田　浩二	福士　正範	〒272-0127 市川市塩浜４－１－１	047-395-1040 047-395-8134	2020・ 2021年度	
15	千葉市立緑が丘中学校	長倉　健	斎藤　聡	〒262-0013 千葉市花見川区犢橋町213－４	043-250-3803 043-298-9381	2020・ 2021年度	
16	浦安市立明海南小学校	津野瀬理恵	鈴木　裕貴	〒279-0014 浦安市明海５－５－１	047-382-1751 047-382-1783	2020・ 2021年度	
17	流山市立八木南小学校	佐藤　智子	小松菜津美	〒270-0146 流山市芝崎92	04-7158-1142 04-7158-1284	2020・ 2021年度	
18	東金市立福岡小学校	新田　篤	飯森　敬	〒283-0056 東金市砂古瀬422－１	0475-52-5361 0475-54-2497	2020・ 2021年度	
19	木更津市立東清小学校	前田　達哉	永嶌　裕美	〒292-0036 木更津市菅生114	0438-98-0424 0438-98-0985	2020・ 2021年度	
20	栄町立安食小学校	鈴木　佳子	北川　太一	〒270-1516 印旛郡栄町安食305番地	0476-95-0017 0476-95-6881	2020・ 2021年度	
21	須和田の丘支援学校	五十嵐祐子	芳賀　裕美	〒272-0825 市川市須和田２－34－１（須和田校舎）	047-371-2258 047-373-1666	2020・ 2021年度	

2020（令和２）年度　千葉県ＮＩＥ推進協議会　役員

2020年5月1日　現

会長	藤川大祐	千葉大学教育学部教授
副会長	長島貴浩	千葉県小学校長会会長
副会長	横山昌彦	千葉県中学校長会会長
副会長	平賀洋一	千葉県高等学校長協会会長
顧問	澤川和宏	千葉県教育委員会教育長
顧問	磯野和美	千葉市教育委員会教育長
幹事	庄司彰	千葉県小学校長会副会長
幹事	寺尾里代	千葉県中学校長会副会長
幹事	釜菴徳行	千葉県高等学校長協会副会長
幹事	渡辺あけみ	千葉県特別支援学校長会副会長
幹事	梅津健志	千葉県教育庁教育振興部学習指導課主幹
幹事	渡邊涼二	千葉県教育庁教育振興部学習指導課指導主事
委員	松田京平	朝日新聞社　千葉総局長
委員	斎藤浩	産経新聞社　千葉総局長
委員	鬼木洋一	東京新聞社　千葉支局長
委員	真鍋正巳	日本経済新聞社　千葉支局長
委員	松之舎茂喜	日刊工業新聞社　千葉支局長
委員	鮎川耕史	毎日新聞社　千葉支局長
委員	吉山隆晴	読売新聞社　千葉支局長
委員	佐々木昌巳	時事通信社　千葉支局長
委員	佐久間護	共同通信社　千葉支局長
委員	佐藤大介	千葉日報社　編集局長
監査	（原則、各新聞社による九社会幹事）	
アドバイザー	松井初美	香取市立新島中学校教諭
アドバイザー	武藤和彦	市川市立市川第二中学校初任者指導員
アドバイザー	神尾啓子	千葉県新聞教育研究所主宰
アドバイザー	石川剛士	市川市立宮久保小学校教諭
アドバイザー	芳賀裕美	市川市立須和田の丘支援学校教諭
アドバイザー	大塚功祐	千葉県立国府台高等学校教諭
アドバイザー	磯貝真規子	千葉県立匝瑳高等学校教諭
アドバイザー	瀬和真一郎	松戸市立松戸高等学校教諭
アドバイザー	木村早苗	私立茂原北陵高等学校講師
事務局長	安原直樹	千葉日報社読者サービス室長

千葉県 NIE 推進協議会事務局
（千葉日報社内）
〒260-0013 千葉市中央区中央 4-14-10
TEL 043-227-1139　FAX 043-224-3662